

し だ

第 22 集



山は

地図で見ても分らない

本で読んでも分らない

写真でながめたものとも違う

自らの足で登り

自らの眼で確かめる以外に

山

理解することは

できないのだ





目次

扉	1
過ぎし日々を思えば……	4
新ハイの魅力	5
初山行	5
登山者	6
矢倉岳山行より	9
山と私	10
処世山行記	12
山を歩いて六ヶ月	13
丹沢を歩いて感じた事	16
丹沢	17
丹沢のヤブコース紹介(塔ヶ岳から高松山)	18
思うこと	22
スキー学校劣等生の記	25
YJ	29
赤湯温泉附近の熊と蛇	32
尾瀬の思い出	34
詩	35
鈴木利男	
柳原美智子	
青木美枝	
小林正江	
吉原正夫	
山田 進	
茂木典幸	
宮川光男	
工藤順三	
宮川 豊	
塚 清人	
石川一男	
松川紀子	
鈴木国之	
福田智恵子	
伊藤信子	
高杉良英	



[Illegible text block]

[Illegible text block]

[Illegible text block]



回回回回

過ぎし日々を思へば

鈴木利田方回

過ぎし日々を思へば……折り返り過ぎを  
 まき、現われては消えゆく、山と山、人と人、  
 なごり惜し気に、静寂の中をゆっくりと消え  
 ゆく夕日に、言葉もなく佇み涙した日。暖か  
 き夏の心に、なぐさみ、たわむれ遊んだ日々  
 。狭いテラスに身を寄せ合い、明日を話した  
 人、巡り合ひ、歓喜を共にした人々、今は遠  
 き人々、再び微笑を見せてはくれない人。  
 人……消えゆく、こだまの様に。  
 山……重なり合い、かすみ人と共に消えゆ  
 く。

夕日がお寺の屋根を染める時、  
 サザンカの庭に夕キ火を見る時、  
 山の端を眺みゆく心で眺める。

幼き日々を描いて……

そして、家の灯を思う。

山を埋める雲海が綿の様に輝く時

小鳥の鳴声が何処からか流れ来る時

朝飯の粗食を微笑ながら食らう。

そして、やわらかい風を、草のしとねを思う。

思い出は夢、つかむことの出来ない夢。

いとしい人よ、なつかしい山よ、一人山頂に

佇み、嘆き優う、あの時の吐息は、巷の風に

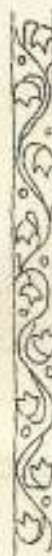
消されてしまっていた。

二度と帰らぬ、去ってしまった日々、山々

人々……。

## 新ハイの魅力

柳原美智子





思いついて始めた習い事の仲間には、新ハイの会員が三人もいらつしやつたのには、とてもびびりしてしまいました。この三人の方々の年齢層が又実に大きく、いつたは新ハイの魅力というものは何だろうと考えざるを得ませんでした。男女に關係なく広い年齢層、厚い会員数、これは無理ない山行をめざす新ハイの主旨そのものを現わしている姿ではないでしょうか。新ハイとはどんな歴史を持ち歩んでいらつしやつたのか、欲ばりな私はとも知りたいたと思います。新ハイの本を読んでも、それらしきものはつかまえる事が出来ませんが、実際に話を聞いたリして、大先輩達と、肌と肌で接してみたいと思つたりします。本部山行にいつて、いろいろ教わりたいたいのですが、なかなか思うにまかせず、寂しいと思います。これから少しづつ年を加えていつても、新ハイの仲間として行動する事が出来たら、どんなに幸せかしらと思つてい

ます。

## 初山行

吉岡木羊天杖

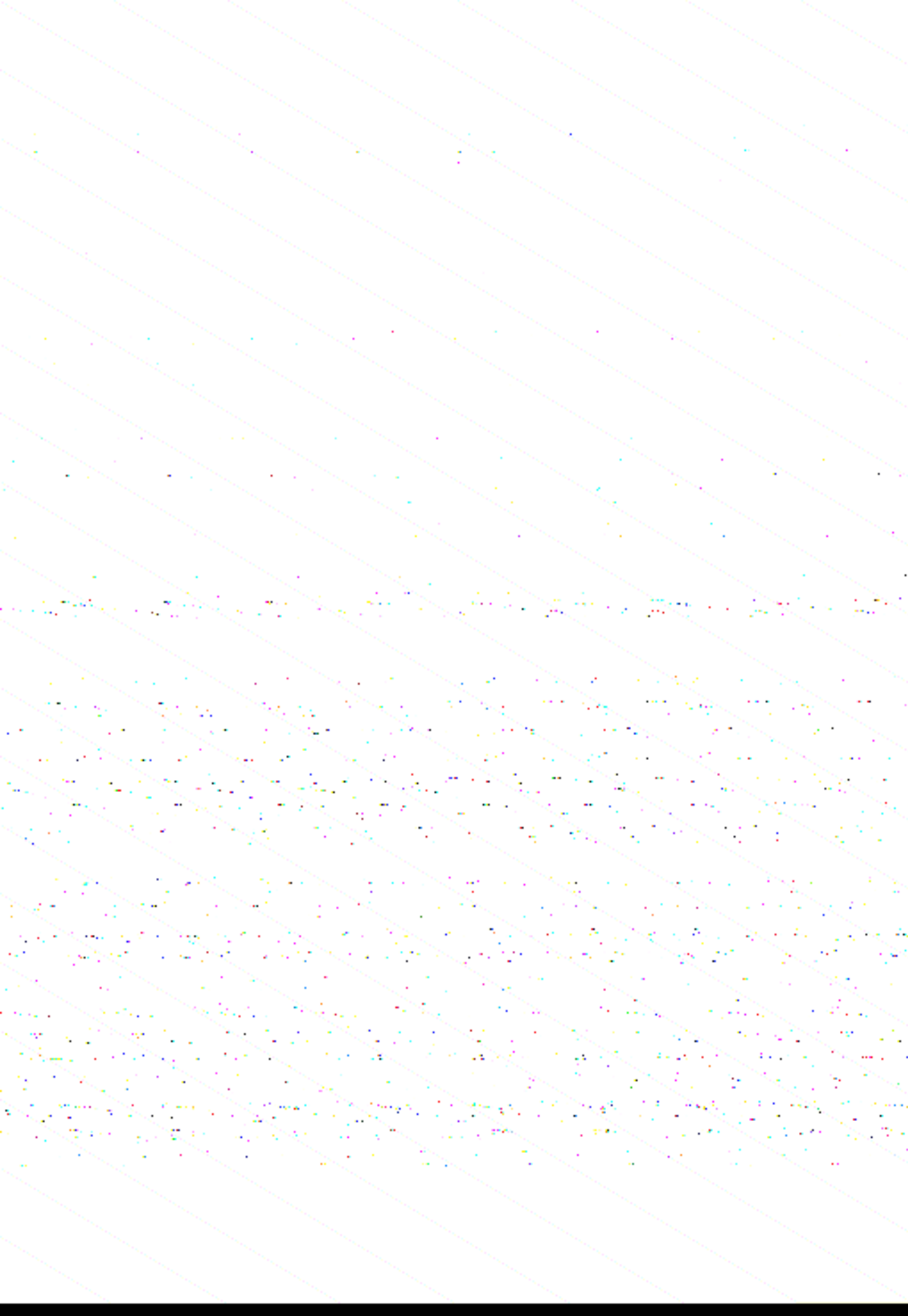
私が山歩きをしてみようと思いつたのは、五月のある日新聞の片すみの市民の広場とゆう所に「残雪を求めて尾瀬の探勝ハイクル募集」と言うのが出ていたので、前から一度尾瀬の水芭蕉をみたいと思つていたので問い合せた所定員が一杯とゆう事ごとわからせてしまいガッカリしているに、弟が東武のパンプレートをもらうてきてくれましたので早速申し込んでゆく事が出来ました。その時キャラバンシューズを初めてはいたのです。一度きりでは靴がもつた位なので、これから機会があれば参加したいと思つております。尾瀬を含めて、二回きりいつていません。











チェックポイントの水場に到着し、ここで一眼。この水がまたすごく美味しいこと。家ではこのような水は飲めません。ここが自然のいい所。一休みした後は最後のチェックポイントである酒水の滝まで、のんびりとさんぽに行きました。滝まであと二百メートル位になると若者に任せて一気に、石段を登りま

した。ここで印をもらい一眼してから下の広場に集合して抽選した結末小生は幸運に恵まれ軽登山靴が当り、いままでの疲れがいっぺんに吹っ飛んでしまい口どりも軽く我家に向いました。皆様方のお話を楽しいラリーができましたことさ。ここに文面を借り御礼申し上げます。

## 山と礼

山田進

山に登る。いったいどんな気持ちで、どんなきつかけで山に登っているのだろうか。私が新ハイに入る前に登った山で今でも思い出すのは、平塚へ出て来た年に会社の人につれられ丹沢に登った時のことだ。山に登る為にはキハラバンシューズを買ったまではよかったが、かんじんの交通費は、『0』で、翌月の給料をもちうまでには山に行けないといった状態で

あったが、なんとか登ることが出来た。それは土曜日の夜、バカ尾根を登って塔ヶ岳で一泊し翌日は幕次まで歩いたが、大倉尾根では駒柱がたちその上をザック／＼と、ザックを背負いながら登った時のなんともいえない気持ち。月夜で湘南遊歩道路の水銀灯が海岸線に倒って綺麗な曲線を描き、又富士山が月夜に照されやさしくそのシルエットを私の前に



見せてくれたこと。

翌朝は、東京の空の雲の上から、東京タワーが、おはようとはばかりに顔を出してくれ、なんともいえない夢の中で登っている様な気持であったが、これが私の山について一番印象に残っていることだが、この時以来このことが忘れられず数回登ってはいたが、同じ様な状態に出合わなかった。その当時はいつかきつと同じ情景に出会うことが出来るだろうと想いながら登り、山に登りたいから登るのでなく、もう一度あの時の情景を見たい、あの時の気持を再び味わいたい、ただそれだけで登っていた様な私の山登りであったが、最近の山登りはなぜかむしろどうにもいいか歩きまわりいつも体を動かしていたい。自分のやるせない気持を山に登ることにより癒そうとする。



そんな山登りであり、時々まっすぐなまっすぐでもっと重き命が尽きるまで歩いてみたい、無事に歩いてみたい、そんな衝動にかられることがある。しかしだんだん皆ヒロツトに歩いていくことが、楽しくなりつつあり、又いつまでも歩けるかざりには登って行きたい。そんな気持になつてきた私であり、私の生活の大きな部分を占めるものとなつて来た。これが私と山の思ひ出であり、いつわらぬ私の気持である。

# 奥白根山行記

茂木典幸

小生の最初の登山は奥白根山で、昭和36年の夏末或三人でして、その時の予定コースは、湯元→白根沢→天狗平→前白根→五色沼→奥白根→鉢陀ヶ池→五色山→金精峠→湯元でした。今考えると、このコースには少しきつい行程だったのですが、それでも若さにまかせ、白根沢まで飛ばして行ったのですが、とうとう天狗平までバテてしまつて、もう帰ろうかなんて話が出来ず、結局ここまで来たのだから無理しても前白根だけは登ろうと言ふ事で、急な登りを何回も休み、登りました。しかし前白根から見ると、大真名・小真名子山などは、今まで表からばかり見ていたのも、これがあの山かと思つてはどちがった形なのでビックリしたり、感心したりしてし

まいりました。そして奥白根をジッと見て居ると、お前らそんな所で感心しているやつがあるか。ここまで来て思つた通りを見ていると語りかけてくるように、異様にそばえ立つて居るのではないですか。それで、ここでこれなら奥白根に行けばもっと良いだろうと疲れも忘れ途中五色沼で小一時間並び登りました。山頂に着いてみると前白根など問題にならない位、展望はバツグンで、太師山・戰場ヶ原・中禅寺湖は勿論、表連山や根名草奥鬼ヶ沼を遠くは燧ヶ岳・那須・秩父・上越の山々が一望でき感激でした。そして天狗平で帰らなくて本当に良かったと思つながら、岩の上でごろ寝をしながら山の魅力の虜になりました。帰りは予定通り金精峠へ、峠の茶屋で



飲んだコーラの美味さは今でも忘れられませ  
ん。そして神社にお参りして、湯元へ下る途  
中、今日登った山々を振り返りながら満足と

自信で胸が一杯ぞ、又新たなファイトが湧き  
今度は甘峰・赤碓を縦走しようと話し合いな  
がら、家路に着きました。

## 山を歩んで六ヶ月

宮川光男

もう山に登り始める様になって六ヶ月の月  
日が流れ去った。ある人にこの山の会を紹介  
してもらったのが四月であった。それまでに  
は、山らしい山に登ったことのない自分でし  
た。自分の残っている記憶では、たしか富士  
山・筑波山ぐらいたと思う。又そのころはま  
だ山にそんなに興味もなかつたので、登ろう  
とも思わなかった。こういっただけで、登ろう  
のが、去年までの山に対する自分であった。  
ところがどうだろう、今の自分はもう山に登  
りたくって登りたくって、休みの日さえあれ  
ば登りたいという気持ちでどうしようもあり

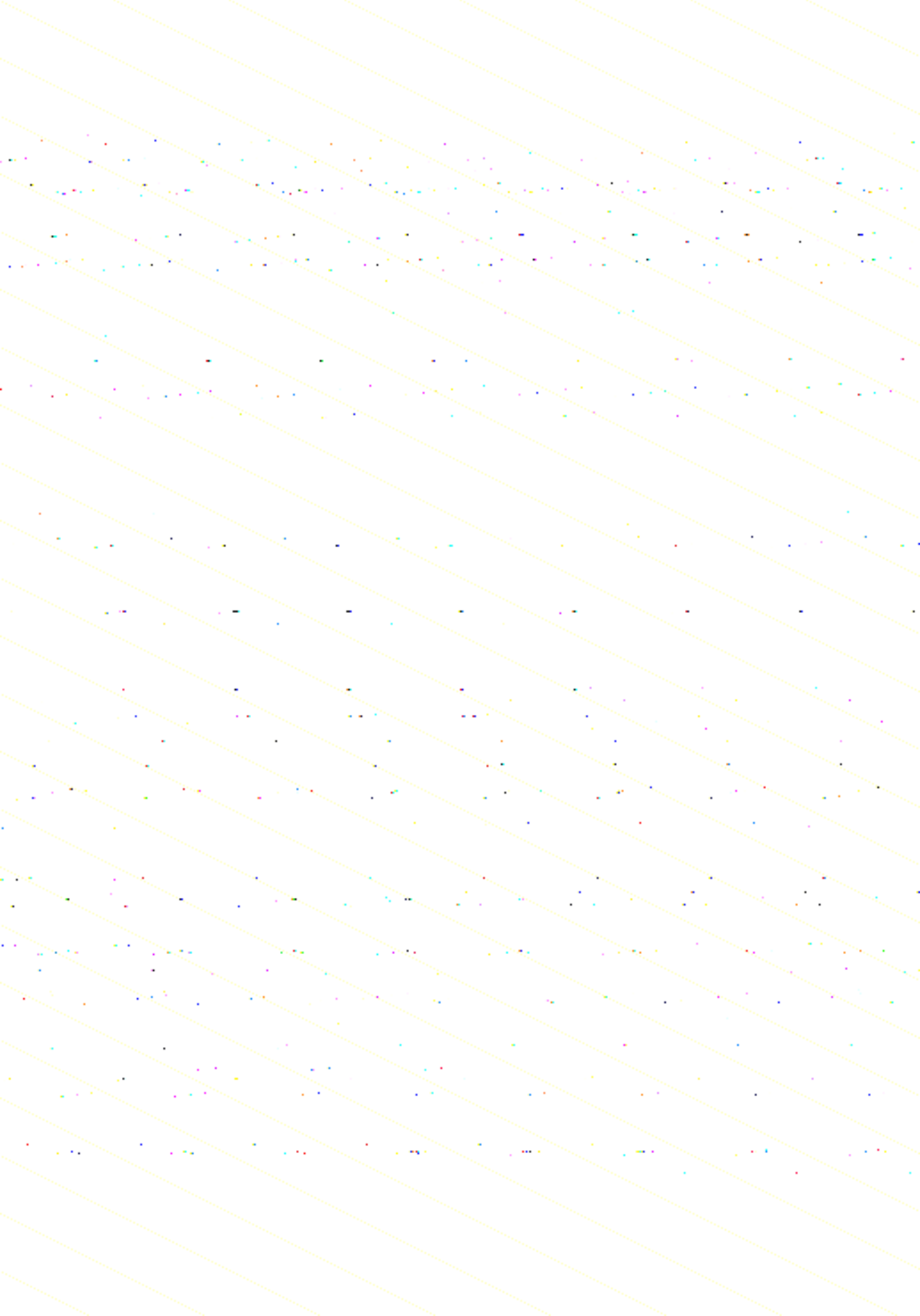
ません。どうして少期間の間にこんなにも心  
が変わったかということには、この場ではさて  
置いておく事にして、これから会に入ってから  
今まで登った山々の一つ一つの山に対する自  
分の思い出を、ほんとうに簡単に振り返って  
見ようと思う。

五月 日光男体山へ支部山行

この時は自分が会に入って最初の山行である。  
初めて身に付けた山の服装。まめ／＼の入  
タイルである。それに初めて背負うザック。  
何もかも初めて身に付けるものばかりである。







# 丹沢を歩いて感じた事

工藤順二

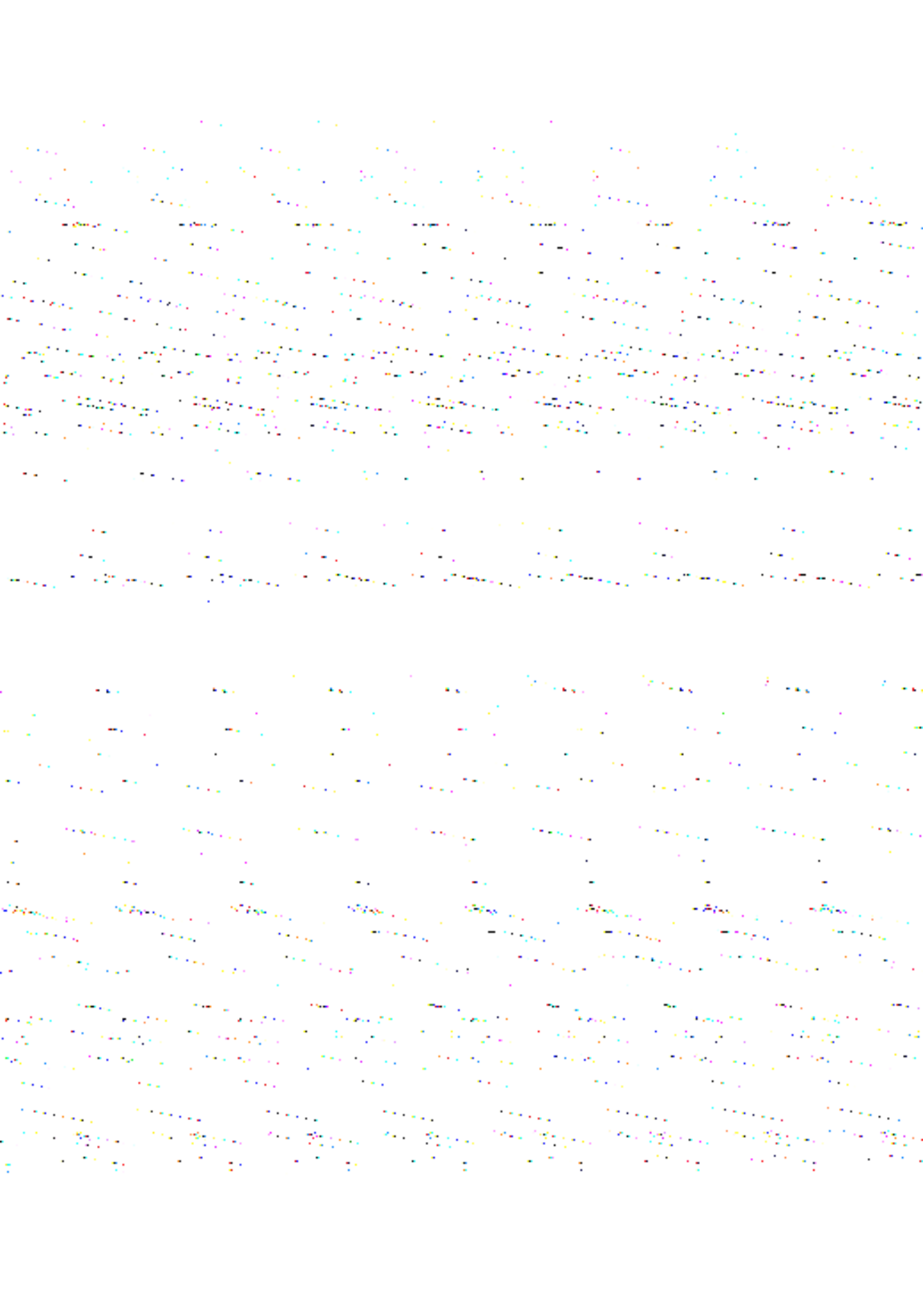
北海道から横須賀へ来て三年仕事も落着いたので今年の四月本州で初めめの山・丹沢塔ヶ岳に登る。天候にめぐまれ何年ぶりかではなく、キャラバンの足どりも軽く、地図を片手に一人でアピツ峠からの表尾根縦走コースを歩いてみる。北海道の山より登った経験がない自分にとって、まず感じたことは登山者の多いのにびっくりする。又子供から老人迄あらゆる年代の人達が楽しそうに登ってる事。又塔ヶ岳頂上からの展望に目を見張り、時間のたつのも忘れて見とれた事。

この塔ヶ岳以来丹沢を歩く事数回。歩く度に丹沢山塊という山の奥深さと自然に心をうたれ、今迄忘れかけていた山に対する思い出が心の底から湧んできた。それは青春時代登

った北海道の山である。函館の高校在学中から毎年登り続けた山容の美しい駒ヶ岳、ツアースキーでよく行ったニセコアンヌプリ、支笏湖を眼下に展望のよい山、恵庭岳、札幌近郊定山沢から登った札幌岳、空沼岳の初めめの縦走等。主に北海道南部の山を歩き続けた思い出が今はなつかしく思い出される。この思い出を大切にし、今年八月新ハイに入会したのを縁として、これからは本州の山々を歩きたいと思っております。







の山並みの背後には白い雪を被った富士が突  
つてゐる。筆舌に表ゆせない無限の広がり  
が僕の内をどろえろ。

後沢乗越から10分位樹々の根の間につけら  
れた道を降る。ここに小さな滝がある。飲料  
水として適当であるかは疑問だが。こんな小  
さな滝でも現実から逃避せず、社会のわずら  
わしさに悩むことなく、山の中の自分の生活

### 丹沢のヤブコース紹介

## 塔ヶ岳から高松山

庚清人

塔ヶ岳から大倉尾根の階段上の道を約二〇  
分程下り、指導標に従い右手鍋割山稜への道  
に入る。大丸・小丸とピークを三つばかり越  
すが、途中右側が大きく開け、鍾ヶ岳・臼ヶ  
岳・袴洞丸等丹沢主稜の山々が大きく望まれ

を気楽に楽しんでゐる。しかし、人間である  
僕は、暑さと疲れとで肉体を酷使することで  
気楽な楽しさを味わう。

初七ノ沢出合で、靴の底が沫を上げた。一  
つの汚れをも感じさせない美しい丹沢の水沫  
だった。

(一九六九年十月・記)

る所がある。しばらく行くと眼前に鍋割山の  
カヤトのピークが現われ、その右肩には白い  
ベールを纏った富士山が大きい。  
鍋割山頂は東北側が一寸ボサの為余り展望  
は得られないが、後は塔ヶ岳のそれとほぼ同

程度の長  
 望。又山頂には感  
 じの良い老小屋  
 舎の居る鍋割  
 山荘がある。  
 鍋割山頂からは  
 指導線に従い細く溝状  
 になつた急坂を鍋割峠  
 へと下る。  
 鍋割峠は奇とユー  
 シンヒを結ぶものらしいが、  
 峠のユートシン側はほとんど  
 溪道に近いらしい。しば  
 らく行くとい寸した  
 鎖場が三ヶ所ほどあ  
 り、その後ザレてお  
 り、左方には相模灘が大きく  
 望まれ、又振返れば塔ヶ岳  
 が真仏山荘の尾根もはつきりと  
 見える。休憩には良い場所へ出る。次第に不



サがうるさくなつてくるが、鍋割峠から五  
 分程で両山峠へ出る。この間をカヤノ木棚  
 山稜というらしい。  
 峠から左方へ下れば奇、石方へ下ればユー  
 シンへと出れるが、道は余り良くはないら  
 しい。両山峠からしばらくはそれほどでもない  
 が、次第に身体をも没する様なスズ竹のアツ  
 シユへ入って行く。一応踏跡はあるのだが、

それがアツシユの中へ隠れ、又ス  
 ズ竹が両側から覆ひ隠す様になつ  
 ている為、ずっと頭を下げ下を向  
 きながら行ねばならない。下手に  
 顔を上げると竹がすごい勢  
 いでぶつかってくる。  
 時々踏跡がなくなるが  
 、ルートは尾根を忠実  
 にたどっているの  
 一応尾根上を行けば  
 ます間違いはない  
 と思ふ。



いがかげんヤブコギもいやになった頃、山神峠との分岐へ出る。ここにも道標があるが、山神峠への道も蹊道に立いらしい。そこから一〇分程の急登で松岳頂上へ出る。山頂は小広くなっており、標識も数個あるが展望は残念ながらほとんど得られない。山頂からは何本かの踏跡が入乱れており、一寸戸惑うが南面方向へ行く最も明瞭な道をとる。道はしばらくの間は、カヤトの中を行く。眼前にはそれと解る伊勢沢の頭、左方には相模灘がモヤッとしている。山頂を素通りしてこの付近で休憩するのにも良いだろう。しかし又、道は次第にスズ竹のブツシユの中へと入って行き、下を向いてのヤブこぎとなる。

松岳山頂から一時間程で伊勢沢ノ頭へ出るが、ここには導標はなく、又踏跡も山神峠へと明瞭なるのが鏡にているので、よほど注意してないとこれを下ってしまふ。自分も以前これを下ってしまった。

約四〇分程で山神峠へ出る。更に三〇分程

で玄倉へ出ることができた。

秦野峠へはかろうじてそれと解る踏跡を帯西へ下る。この分岐には青のビニールテープが巻いてある。当初の内道は不明瞭であるがその内古ぼけた道標が現われ、踏跡もやや明瞭になってくる。ヤブが次第にスズ竹も、消え砂地でカヤトの下りとなると眼前にはこれから行く高松山へ連なる尾根が複雑にからみ合っているのが見える。

この付近で地図と照合してルートを確認しておきたい。

秦野峠へは伊勢沢ノ頭から約一時間位でとびだす。秦野峠は、奇塔ノ平へと別れるもので、時間のなくなつた場合は左方奇へ、又は右方塔ノ平を経て玄倉へと下ることができ、各々バスで新松田へ出ることができろ。

高松山まで縦走するには塔ノ平方向へ二、三〇メートル行けば道標があり、それに従って左折し、やや下る様になる。途中小沢を渡るが、これがこのコース唯一の水場であり補給

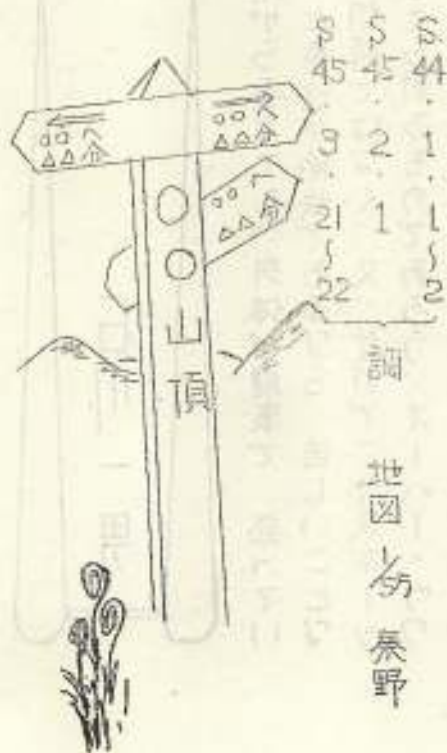
しておきたり。そこから小枝のうるさくまじわりつくブッシュの中を四〇分程の登りで、稜線へ出る。ここにも高松山方向を示す道標がある。エダルマ沢ノ頭、右高松山である。そこからカヤトの中の筈で四つばかり小ピークを越せば高松山へ着くのだが、途中植林地帯を通る際には踏跡が複雑に入組んでいるので注意して行きたい。最後のピークを越れば眼前に高松山が大きくとび出してくる。そこから防火線沿いに登り、尺里との分岐を越れば五分程で高松山頂上となる。ダルマ沢ノ頭との分岐からは、約一時間半である。山頂からは、先ほどの分岐迄戻り尺里へと下る。塔ヶ岳からは、九時間二〇分の行程である。このコースを日帰りで全部歩くのは一寸困難であり、塔ヶ岳あるいは鍋割山頂の小屋へ泊るか、又は前山峠、桑野峠など途中から開始する様になるだろう。しかし鍋割山から桑野峠迄のコースは既に測量も終了し、近いうちに整備されるこのことである。そうすれば

このコースも、もっと大衆的なものとなるだろうが、現在では鍋割山荘の小屋番の話によれば、月に幾人居るかわからないがこのことである。

ヘコースタイム

塔ヶ岳(一時間一〇分) 鍋割山(二〇分)  
 鍋割峠(二〇分) カヤノ木棚ノ頭(三〇分)  
 前山峠(一時間二〇分) 松岳(一時間) 伊勢  
 沢ノ頭(一時間) 桑野峠(四〇分) 稜線(一  
 時間三〇分) 高松山(一時間一〇分) 尺里

調 地図ノ傍 桑野





# 登山のつと

石川一男

山登りに於ては、一つ一つの山がそれぞれ  
独立した理想の対象として成り立つものであ  
って、この場合山の高きを望む心は理想の高  
きを望む心にはかならないであらう。

しかし、登山に於けるこの理想の實現は、  
登頂によって初めて成し遂げられる。登山者  
にとつて、到底登りがたい様な高峰を目ざし  
て敗れるのと、可能性のある、より低い山を  
選んで登頂の喜びにひたるのと、はたしてど  
ちらが幸福と言ひ得るであらうか。

体重が減少し、食物もあまり咽喉を通らな  
い程に体力を消耗した登山者が、酸素の欠乏  
と闘いながら、それでも一歩一歩とあえぎつ  
つ登る姿を想像するとき、これを登山という

立場から考えても、身体が健康で、登つてい  
ること事態が愉快であるなら、苦しいことな  
どは問題ではなく、又、それでこそスポーツ  
と考えられるものであらう。オーバー・ウワ  
ークや病気がいかにスポーツの敵であるか  
はここに言うまでもなく、経験から解かる事  
であらう。もしもこれらの事柄から判断する  
ことが許されるならば、体力を消耗して、何  
もせずにテントの中でじっと休んでいたいと  
願う様な状態にあるものを、意志の力が駆り  
立てて辛うじて登つて行く行為、そしてその  
登山中にさえ最後に残った意志の力を振り起  
して自らを叱咤するのでなかっただけならば、登  
山者は往々にして自らが何ゆえに、そこにあ  
るのかを忘失しようとする危険にさらされる





体力の場合疲労や睡眠が自然と充電のチャンスを手えてくれる。それが充分でないとき、イライラがはじまり、それでもムリをすれば、病に倒れる。

しかし、精神能力のほうはどうであろうか。これは充電も放電もまっぴく自己管理にまかせられているのではないだろうか。

仕事による放電のしっばなしでは物事を管理する能力はとみに劣るのは当然であろう。だが、単に失われるものが、実力だけならば、他の機会に、補うこともできるであろう。こうした状態を恐ろしいのは、それによって、人間らしく感じたり考えたりする能力を失うということではないだろうか。

空が青くても、もう空の青さに心を打たれることがなくなる。花が咲いても、その美しさの前に、足を止める気持もなくなる。まして人間は何のために生きているのかなどを考へることは不可能となる。そして半ば自動人間のように自宅と会社の間を往復するだけで

ある。

「人間らしい感情」とはユーモアであり、やさしさであり、他人のことを真剣に考へるゆとりであり、空の青さ、花の美しさを「しみみ幸福」と感じられる心である。すべて自然に。もし放電しっばなしで、そうしたものが失われると思つたら、我々は今すぐ、充電へと切り換へるべきだ。その方法には各人各様あるはずである。だが、ともかくも充電している状態と解かるのは、我々が「自己」に向き合っている。――「自己」を取りもどしているという感じがあるときだ。我々が本当に「幸福に生きる権利」を主張できるのも、こうした「自己」を深く自覚してのちではないだろうか。すくなくとも、こうした自覚に立って「幸福の要求」は、「人間の尺度」と考へていいことは確実であろう。



コバイヤソウ



山スキー場は札幌国道のちょうど中間にある。自宅から三十分以内で行けるゲレンデをふんだんに持つ両市の市民にとって、ここは遠い部類に入るとか、ナイターともなるとりフトを動かしてもらうのが申し訳けない程人影が無い。風の冷たさは近隣随一で、厳冬期ともなるとアイスバーンどころかスケートリンクを斜めにしたような状態になる。

生れて初めてスキーなるものを履いてから、今夜で二週間。土、日曜以外はナイター専門である。コチンコチンでガリガリのゲレンデは、胸に描いたメルヘンの世界とは大違い。白一色うすび、うすびな斜面に、シヨアール一筋、彼こがなびやうとツと舞い上るなんてのは夢のような話だと、一歩も歩かぬうちに悟った。

義兄も姉も、私があまりしげく、と通うので、きつと指導員はてせ心をき立てる美青年たろうと信じているらしい。SADJの公認指導員で、本職は北海道庁の開拓部に勤め

る公務員。札幌スキー連盟の中でも技量・指導共にピカ一と折り紙つきでとってまかせしい紳士だし、それはそれは……と鳴り物入りで紹介された。先生、私ならずともさぞかし、と胸をときめかしたところを罪にはなるまい、しかし何かと愚いげなぬも世の習い、初対面から絶望の悲哀を味わつた事をまずお断りしなければならぬ。身長一六〇センチそこそこ、おん年三十五才（二年前）にして頭薄く、顔はと見ればこれが正にチヨコレート色。それもミルクチヨコのようなソフトタッチならまだしも、純ブラッフルを以てかっただ。考えてみれば、彼を紹介して下さった御仁、確かに先生がみえうるめしき青年とは、宣わなかつた。以後、私が人を紹介する時は、夢々容貌の説明を忘れまいと、深く肝に銘じた次第である。聞く方は本能的善意によつて、兎角、眉目秀麗なるモニタージユを作成しがちであるから。



その夜も美しい夜景であった。

丘下の札幌国道を隔てて闇の中に広がる日本海。背後には小樽へ続く低い山波があり、春は桜に色取られる魚止の滝も、俗臭届かぬ朝里の温泉も、今はひっそりと雪に閉ざされていくに違いない。

海岸線に沿ったうねりの彼方は札幌の街灯りである。ヤ世に向って敬を増す灯の群は、凍まついた潮風のむこうでぶる／＼とまたたき、厳しい寒さのせりであろうか。それは神々しいまでに清冽であった。

海から吹きつける風を避けて、ヤッケに首を埋め、亀の子よろしく縮こまってリフトにしがみつくのだが、二月の春香山ゲレンデは痛いような寒さである。

「行くぞ」

リフトを降り、急な台の上からゲレンデのシンボルのように残り残した灌木の側まで、優雅に滑って行くのはO先生。

どうして、こんな斜度で建てちゃったのか

しらと、リフトの設計者を恨めしく思いながら、死んだつもりで突っこんで行く私。

転び方から斜滑降、ブルークノーゲン、山まわりと、辛うじて卒業。二日前からシユテムクリスチャニアに足をフッコんでいるのだが、何しろ脆けなライトの下は洗濯板を凍らせたいような斜面である。シユテムギルランデをしても、谷スキーはガタガタ／＼音を立て、放し。シユ／＼なんていうシャープな音など出ようがない。

さあ、そのクリスチャニアだが、斜滑降から立ち上り、開き出して最大傾斜線まで落としこむ。その時谷に向ったの乗り出しを積極的に行わなければ、力強く美しいスキーにはならない。そうであるが、そうそう教科書通りに行く筈がない。恐る恐る乗り出して見ると下ははるかな闇ばかり、ひよっとして穴でもあるんじゃないかしら……。内スキーを引きつけ、沈みこんで山まわりに入る。うかうかしていると、方向転換はしたもののどこ









様だ。この温泉と翌日の雨飾山はいわばフロフのようなものだった。八方尾根に天幕を張り、唐松から五竜岳での3ヶ日は好天に恵まれた。当然、悪天の日も考慮して充分に余裕のある日程を組んだので、登り終った右、かねてから狙っていたこの温泉と山へ来たのだった。

翌日も好天に恵まれ無事登り終った右、香美やゼンマイを摘みながら春の山を下りて来た。緑は一段と鮮やかな色合を増していた。

### 日光沢温泉

樹林の道が緩やかになって、急に明るい光の中に飛び出した。そこが鬼怒沼だった。以前、戸塚文子が尾瀬の俗化に対して鬼怒沼の水芭蕉の美しさを称えていたのを聞いた事がある。その時は尾瀬の燧岳も日光の山々も、もちろん可憐な水芭蕉も見れなかったが、時々射し込んでくる陽がきつぬ色に枯れた湿原一面を照らして、まったく静かな雰囲気で、

小さな宝石の様な場所に相応しかった。

晩、日光沢温泉へ泊まった。9月の下旬だと言うのに今年は何年になく紅葉が早く、この辺も10月に入れば紅葉できれいになりますよとの話だ。

乳濁色の湯に浸りながら明日の紅葉の根名草山から温泉岳、金精峠の事を考えた。

### 藤七ノ湯（トウシチノ）

ある年の10月中旬、秋田駒、千沼が原、乳頭山を越え三ツ石山から八幡平へと続く裏岩手縦走路を歩いている3日目、明日はもう八幡平だけを越えれば良いのだからと言う事で、天幕を張らずに温泉に入る事にした。藤七温泉の特色は地熱を利用した蒸風目である。もちろん普通の温泉もあるのだが……。

通された室と言うより所は三方が板で囲まれ、ムシロが敷いてあるだけのシロモノで、育ちの良い我れ我れにはヒマも寝られる所ではないと思っただけ、とにかくグランドシート



を敷き、団りの汚ない物が見えない様に天幕を吊ると不思議なもので、居ごころのよさやうな雰囲気になる。

普通の温泉の方は薄暗く混雑していて、落着いて入ってられない。例のムシロの敷いてある蒸風呂風の室では一晩中、熱い地熱が背中から伝って来て、外は冷たく寒いのに真夏の夜を想わせる暑さだった。

### 稲子湯（イトゴ）

初めての冬のハガ岳を越えて、緑池へ下りた。本沢温泉で張る予定を強引に歩かせて。

## 赤湯温泉附近の熊と蛇

最近、赤湯温泉附近に熊が出るという。この夏、苗場山登山の帰途立ち寄った際に聞いた話である。しかし赤湯の熊は北海道の熊

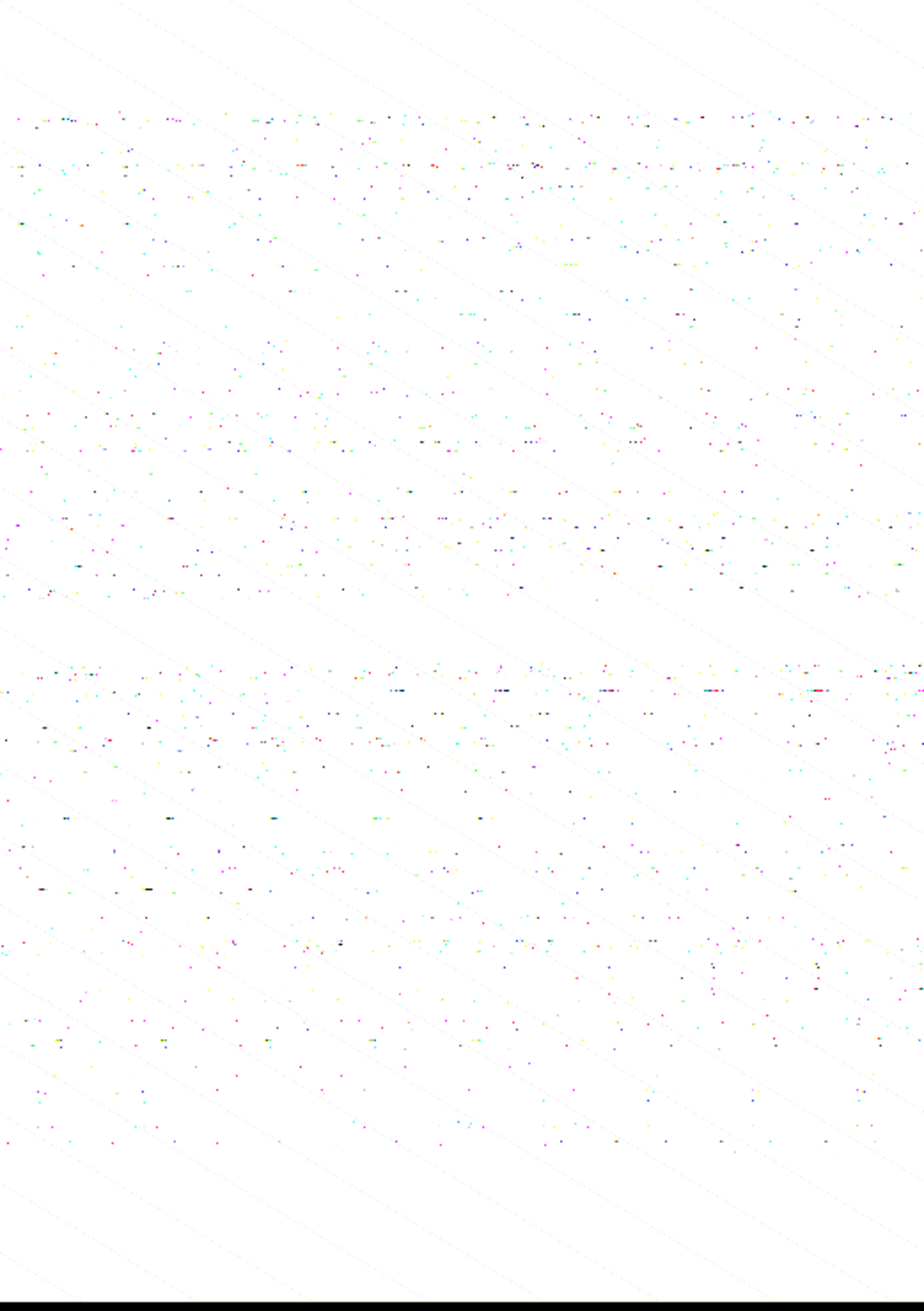
緑池の少し行った平地へ着いたのは7時過ぎになつてしまひ、雪の降る中をヘッドランプの光だけをたよりに天幕を張った。その日は夜半過ぎまで唄い、語り、さわりだ。

翌日、降り続いた湿った雪の為、猛烈に重くなつた天幕を背いて稲子湯へびしょ濡れになりながら下つた。

暖かい飯泉に入り、暖かい食べ物に思まはつとする。幾日かの苦しくつらい事も今はもう過去のものとなつて、楽しい事だけが想ひ出されて来た。

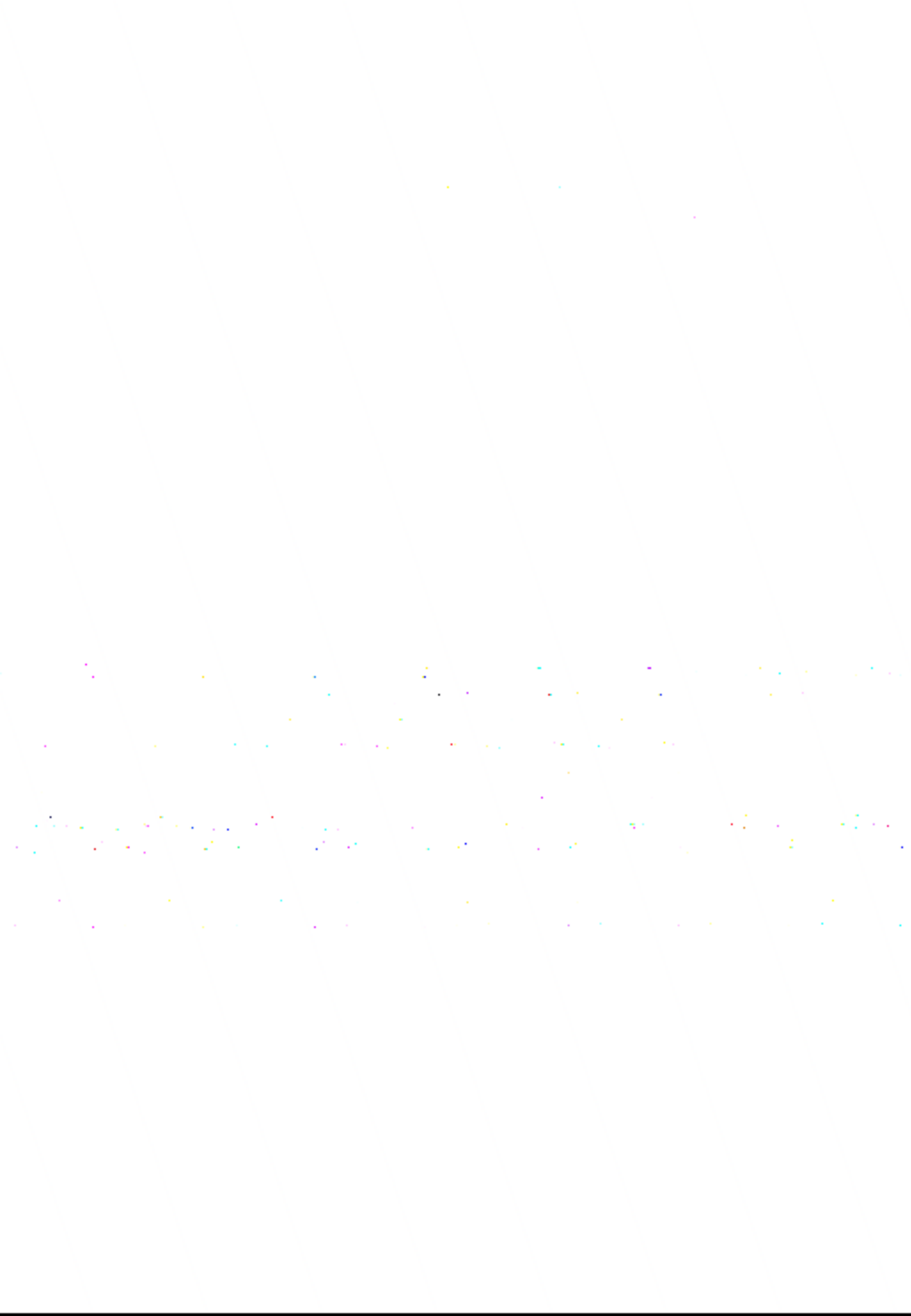
### 福田智恵子

と遠がけ温頓で人間様が干出しさえしなけれは絶対にはさまはこないやうである。とはいふものの私はいまだかつて動物園の檻の中の

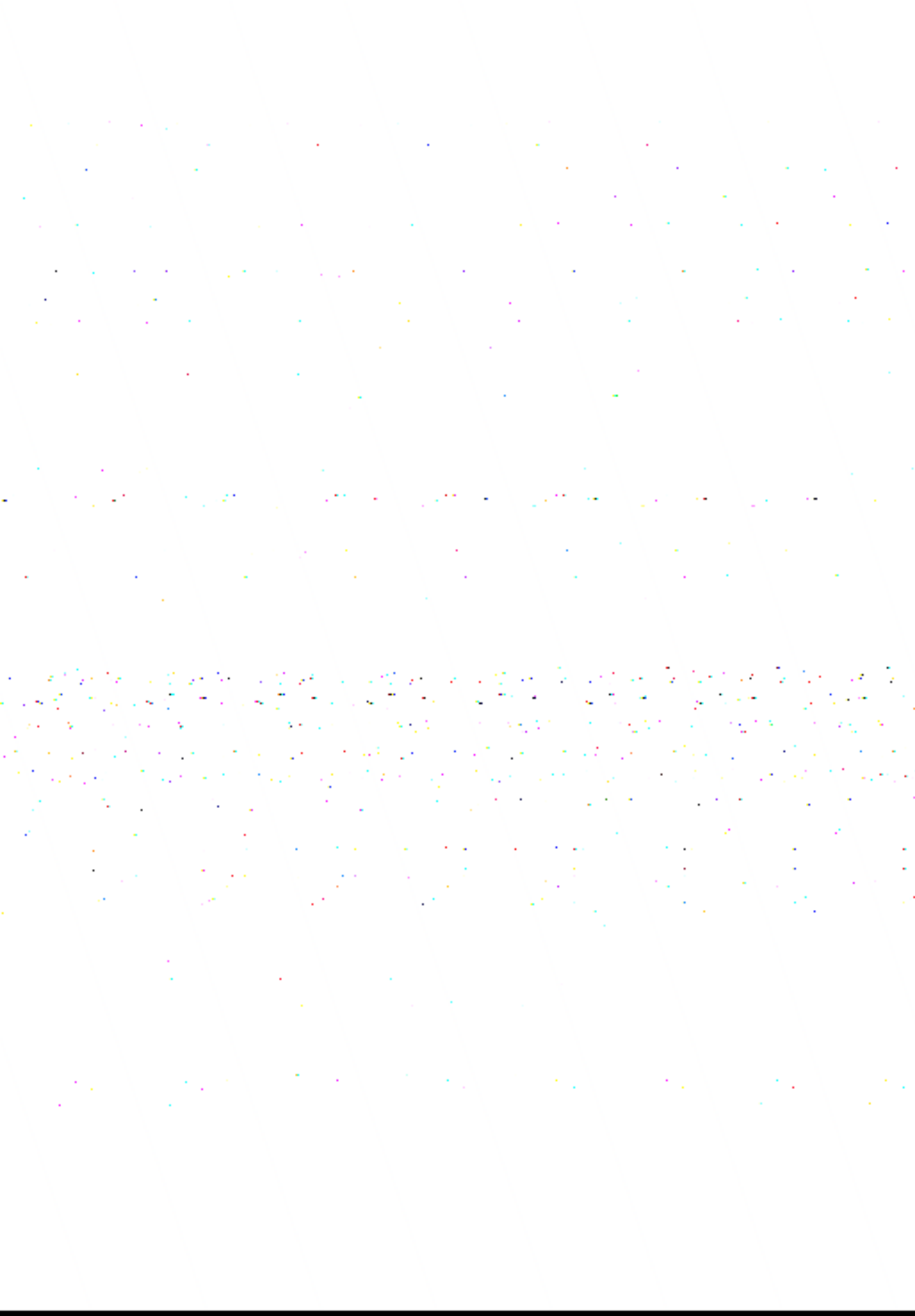
















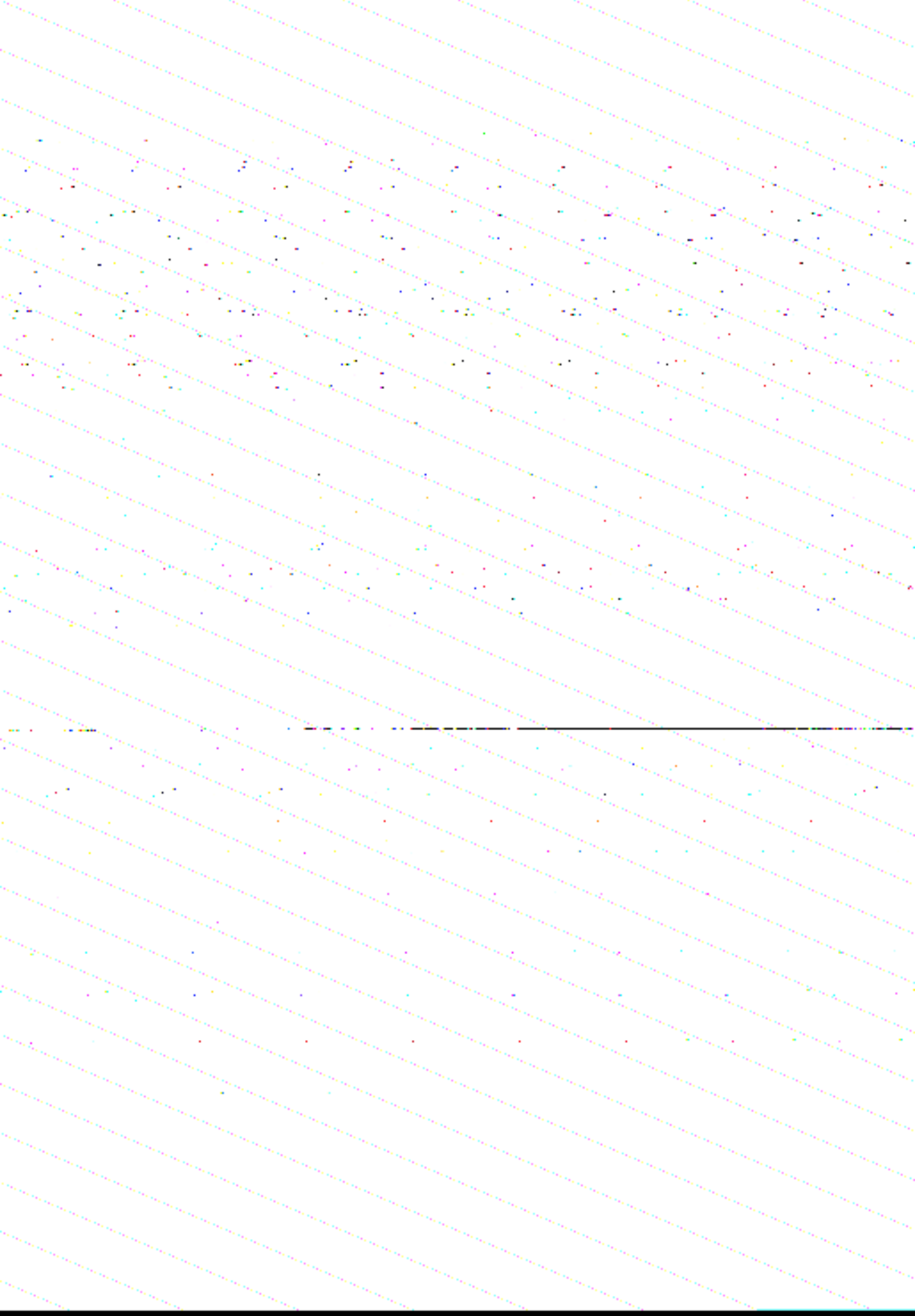












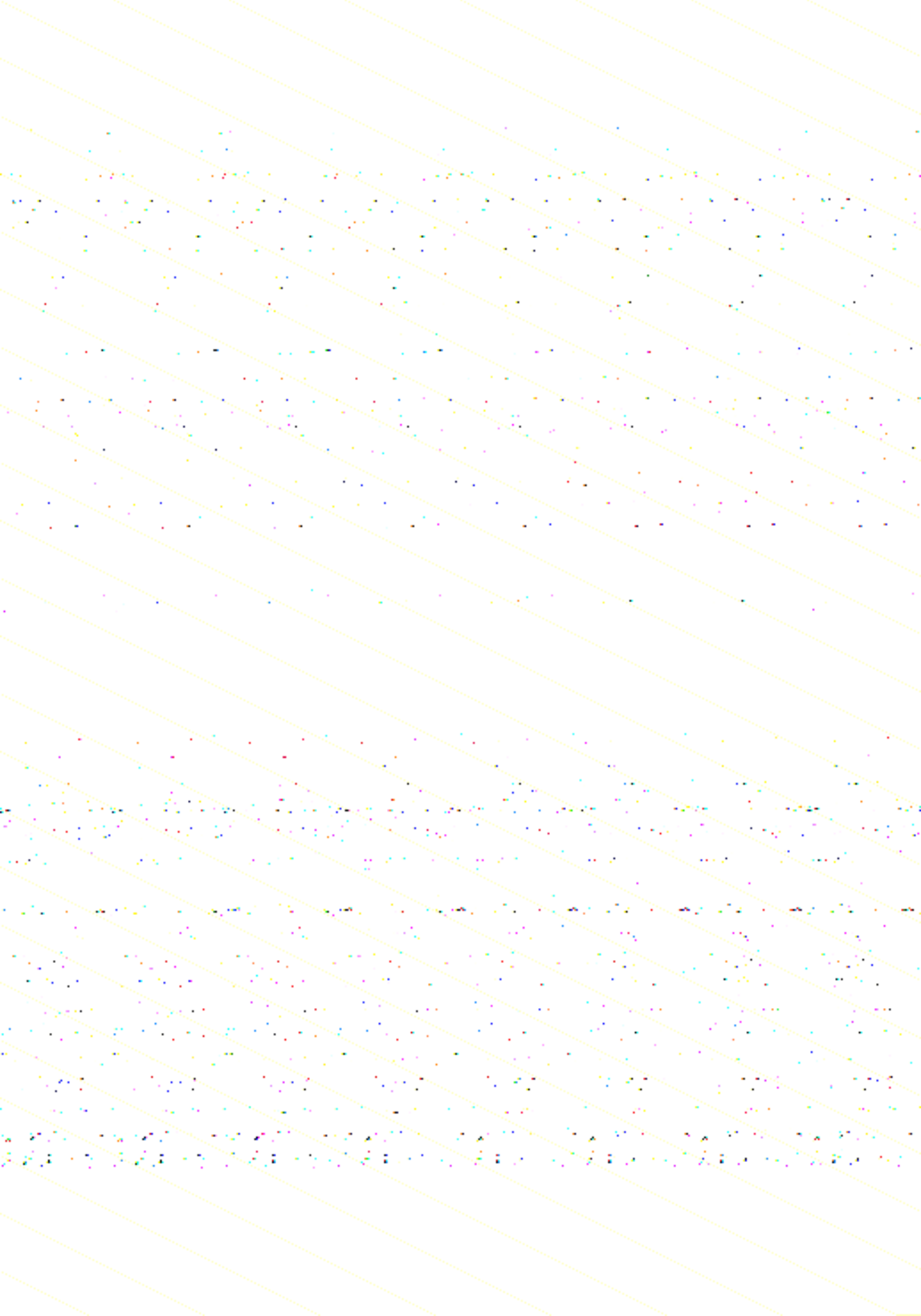


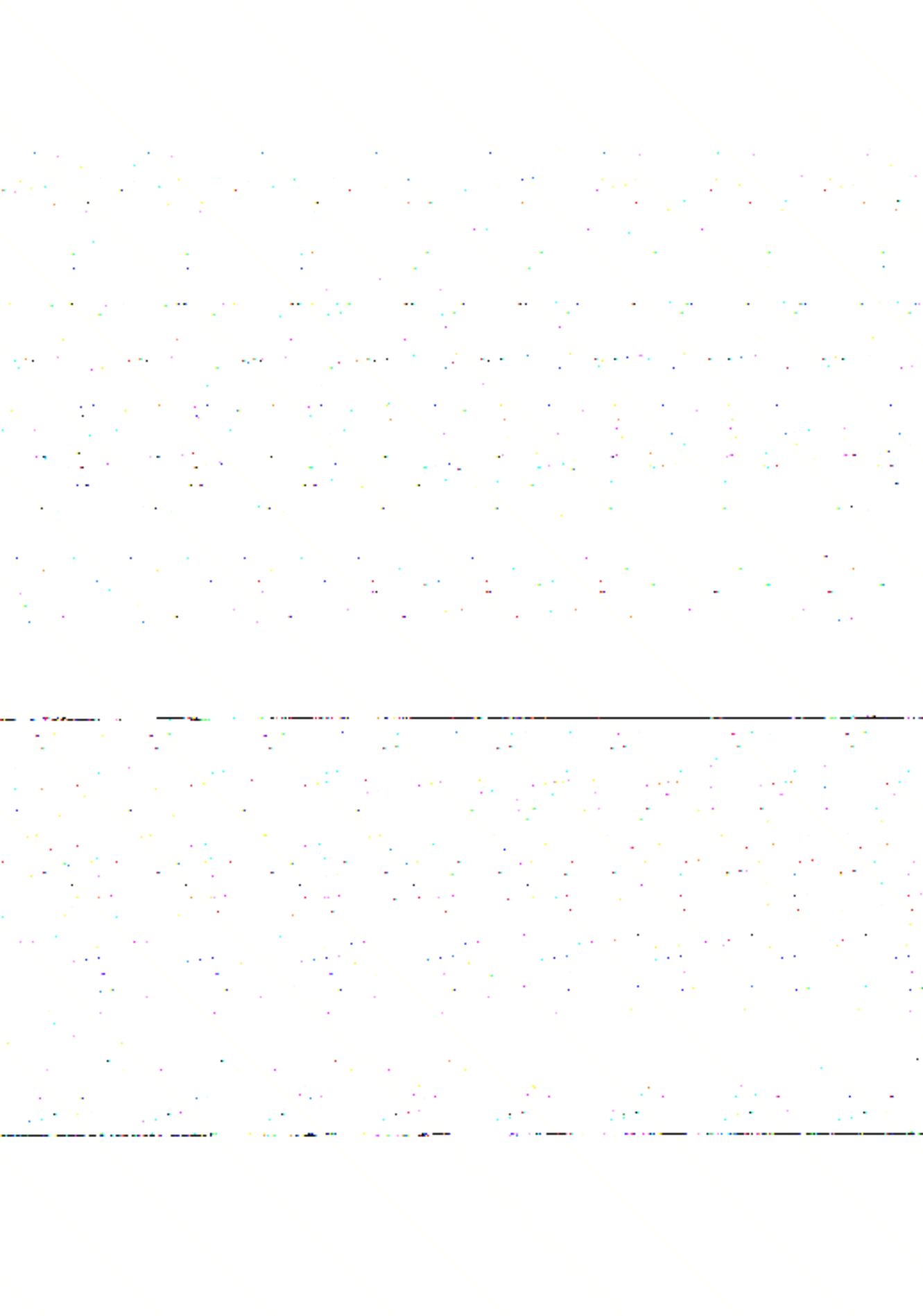
# あや山旅

代百井松

或る九月の中旬友達に高ボツチ・鉢伏に行かないかと誘われた。日頃山とはほとんど縁のない友だのどんぼ所がついて行くことにした。四人の予定が二人だけ二人ボツチで高ボツチに出掛けることになった。打合わせも余りせず二人で食料だけはふんだんに買い込んだ。日曜日は家で休息、明けて月曜日新宿で十時待ち合せへ私は遠才だから十時でよいと言うしそれで午後九時三十五分新宿に着いた。友を捜したがみづからない。人の少ない列に並んで待つことにした。発車十分前に乗車し、やっと席がとれた。ホームに降りて見

廻すと友は赤いセーターにミニスカートの、ハイヒール姿で立っていた。(私はスラックスにサブザック姿)列車が東京を離れるに後、次々に青空が広がって来た。ハツ岳が眼前に現え始め、先通登った赤岳がはっきり望める。左に南アルプス、憧れの甲斐駒の山貌が真近に眺められた。いつかきつと登ってみようと思う。振り返れば、富士山が聳えている。松本まで行く予定が岡谷で下車、高ボツチへのバスは休日のみ一日一回の遅延なのでタクシーをたのむ。一ニ〇〇円で行ってくれると言う。車は山道をすいすい登って行く。運転手に「こんな所は車がいなくていやでしょうね」と言えぼ「獨にはいいですよ」とわりと話しやす。盛んに平尾さんの事を話すので誰のことかと思えば平尾高鬼のこと。この辺に入院していた由。この地帯は余り雪は降らないが冬にはヒールが凍る相である。一時間足らずで高ボツチに着いた。さすが高原の風は冷たい。どうゆうわけか一ニ〇〇円







穂高越

宮川 豊

雪溶けの流れ冷たき梓川  
清き岸辺に咲く山桜

落石の多し穂高の道谷を

恐れぬ友の頼もしき顔

晩秋に友と登りし前穂高

握るピッケル雪の北尾根

先輩の指さき示す壘岩

奥穂の峰に映ゆる夕焼け

岳沢の合宿終えて上高地

互いに笑ひし無精髭

新線に帝国ホテルの赤き屋根  
映えて穂高のシンメトリー



長野県……

# ラブレター



徳高、俺がおまえに会ったのは、口つだったろう。俺に記憶が戻り、ずっと昔、それはカレンダリーのグラビダ写真だったと思う。おまえの相棒の大正池との、まるで見合写真そのもののような、おまえのポーズ、そしてカレンダリーの中の、おまえはいつもアルプスの女王のように、ツンとすましてける。

俺は最初、こんな通俗的なおまえに、嬉しさを覚えていたが、おまえとの写真の出会いから十数年たつと、俺は夜におまえに魅了を感じ始め、そして離れられなくなっていた。

まさか俺が山ヤになろうとは思ってもみなかったが、毎年写真だけで見るとのことのできなかったおまえに、左に一目会いたさに俺が上高地に来た日、おまえ、覚えてけるかい、そうだったな。夏山前の長雨の中休みと口つた日、今でもこの日を思い出しては、俺はゾクゾクする、それこそ、ぬけるような青空の、すばらしい初夏のある日、俺を乗せたバスが釜トンネルを出て、鏡岳が見え、また、おまえを見る事ができまいと高をくくっていたところ、大きなカーブまでがリ切り、俺がフツと目を前にやると、おまえがスーと立っ

ていた。俺は一瞬、息もできなかつた。まるで登みきつた大気に、距離感を失つた山頂が、青丁至る空に融けこんで、おまえは山といふよりも、それは何か幻のように思えた。河童橋からもおまえを見ただ、そしてテントを担いで小梨平からも新緑のカラ松林ごしに、おまえを見上げた。初期アルピニストの感激に浸りたいために、徳本峠にも登った。小梨平で一泊して、タンポポの咲いてゐる徳沢にテントを張って、夜食作り前に、梓川に下つて暮ゆく、おまえに見とれた。

その後、救回せアルプスに登リ、そして登つた山の頂から受ずおまえの山影を見ない事には俺はその山行には満足できなかつた。俺が、こんなにもホレてゐる徳高、おまえは何んと、八方美人なんだ。幾人もの若者に色目を使ひ、そして冷たく、おまえは若者をつき離す。『氷壁』の小坂も魚津も……。

俺は、まだ、おまえに手もふれてはいない。しかし俺の若い血はとわぐ。おまえが雪で化粧をした時、俺はおまえを狂服したい。が、内気な俺にとって、おまえと直接、話をする事ができるのは、一つにばるのだから。





白馬↓朝日岳

眺 美英子

五月、六月の山行が雨でガツカリしたのも  
つかの間、七月の末ともなれば夏山の季節、  
お天気に大変な期待をかけた、秩立山へ行く  
事にした。ところが、日にちがあわばくで御  
坂道、でも秩立山はダメだったけれど、その  
はずが、お天気がよくまがてきた。一度北下ルブ  
スへ行くと見た口と思つてはたので、白馬へ  
行く事になつたのはとてもうれしかつた。

いよいよお天気が、お天気が上々、大雪渓  
に入るまではあつて、くく、たまらなかつた。  
けれど、雪渓に一歩入るとスリッパとする。左  
の人が多くて多くて、下から見ると一列にス  
リッパと上まで続いてける。雪渓も歩いてける  
時はあつた、でもちよつと休むとこんどは寒

い、ど二からかた石か、カラカラカラと時々  
聞こえてくる。そういへば、私達が休んでい  
た時、もう少してぶつかりそうに落ち石があつ  
た。それは誰かが、下から見ただけでも落ち  
がおこりそうに落ちた石だ。私達に  
けがかたくてよめつたと思つたに、登つて  
ける人自身に危険はなかつた。下にいる人の  
事を考へて慎重に行動してもらつたのものだ  
。大雪渓を登りつめるとそこはネアカツピラ  
。お天気があつて、写真ではよく見たこと  
のある正てもるお天気が知らずにはたかりだ  
。でも、お天気が、お天気が、お天気が、お天気が、  
つたお天気が、お天気が、お天気が、お天気が、  
三十種のお天気が、お天気が、お天気が、お天気が、  
大きなシナノキンバラ、同じ黄色でも小さな  
シナノキンバラ、お天気が、お天気が、お天気が、  
シナノキンバラ、お天気が、お天気が、お天気が、  
シナノキンバラ、お天気が、お天気が、お天気が、







クワの変態、つまり白いニラウツカが咲いてはいた。白いのがあるほどと感っていた。二人とは雷鳥の親子連れ、白鳥でも一羽だけじゃやせ。ぼ。ち。二。ち。は。親子、子供の才がピーピーい々と親が何と、をらひけが、ピーピーという感じで鳴くのでおもしろかった。また剣が目の前にデンと突き出ててもすばらしい。口が登れたら登ってみよう。鉢を後にして雪倉へ。二の夜上はゴミだらけなので早くにして朝日岳へ。途中雪田のそばで昼寝をしたり、カルピス氷？を作った。食べたり食しかった。最後の登りはきついなあと思っていたらあつといふまに頂上。そここは広々としていてどこが一番高いのやら。朝日小屋のまわりには日光キスアがたくさん咲いていた。この小屋は昨日にくらべてゆうゆう寝られる。食後には天然冷飲屋で作ったプリンを食べたけれどおいしかった。

三日目は今日中に帰ろうと朝四時頃起床。暗いうちに小屋を出た。帰りも急ぎながらも

花の名前を覚えてたりしながら歩いた。花は白鳥の時はどはどはのははかっただけれど、干又が草やゴゼンクチバナ等があった。

夏はお天気もいいし、花も咲くし、ただあついのが嫌な。べいたくかしら。雪溪のある山より山、どこでも山はいい。ま、ど二へ行くにしても山へ行くはらび花の名前を覚えての方がいいですね。そのうちいろいろ覚えてお愛の名前でも覚えていただけせんか。



朝さん雲の鬼強  
たくさんして教  
えて下さいな



# 秋の山



芥藤 隆子

らくだ色したほだちが山頂には、一週間程前に降ったという初雪が、うすうすと残っていた。明るくひらけた頂に立つと、苦しかった登りも一瞬のうちに飛んでしまった。冷たい風を空けるようにしてする食事、会話、ちよっとした雪がすべて楽しい。こんな気分になったのは本当に久しぶりだ。

山には冬が目前にやってくる。木には葉をすっかり振り落とし、山道は枯葉に埋もれてはいたが、日がふりそとぐ山肌は思いの外、明るかった。

山頂を辞して下りの一休み、あたりを見回せば、晩秋の寂寥さよりも、深み入るような安らぎがあった。車窓から映めた麓の紅葉は、深紅の中に穂の

すっかりみらいたすゝまが点々として流き、見ているうちに、山頂のこと、山道のこと、明るく日差しなどが、胸一杯に広がり、溢れるばかりの充実感を味わった。

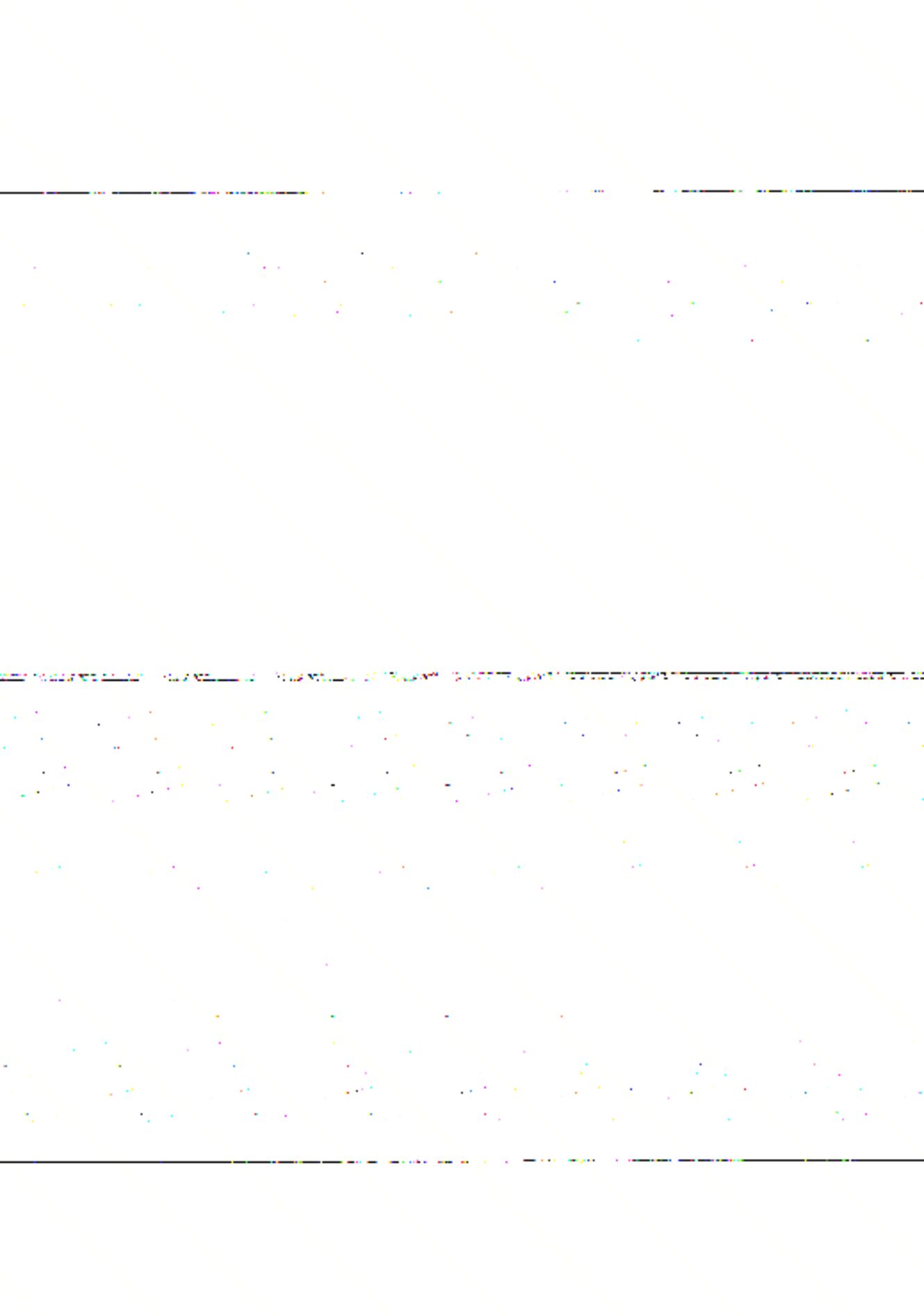
山を歩き始めて間もない私に、この晩秋の暮秋山は強烈な印象を残した。

山といえど、いつか思い出し、秋の山へ登ってみたいと思うようになったのもこの時以来の事である。

翌年の十月、奥秩父へ行った。苦勞して登っていったら、広い林道に出会ってがっかりさせられたが、テントで過ごした二晩は、実に良かった。普段は恥がしがりの私の私も、軟ったり、おしゃべりしたりで、おしゃべりにはしゃいだものである。山から帰っても、爽しさが









ど二が旅行がしたくて、友人二人と相談し  
た結果、全員一致で上高地に決まり、ガイド  
ブック等五湖べると、そ二に載って  
いるのは山のまばかり。

それでは、私達もせ、かく行くのだ  
から、ど二かの山に登ろうという事  
になり、昨年十月下旬、一番手頃な  
大滝山、蝶ヶ岳に登ることにせった。

河童橋洞道は、人の旅だったか

明神・徳沢と並走に、れは少しく  
なり、作、と自然の山と二かに入っ  
てきた感じだ。

徳沢からいよいよ登りになり、黄色  
く染まった樹々を見ながらどんく  
進む。

私達三人は、山の「ヤレ」の字も知  
らぬ人ばかりなので、初めのうち  
は少し心細かったが、時々会う登山者に励ま  
され、一人二人と教えながら登り越して行く



のが奥じかった。  
あまり早く歩き過ぎたせいかな、大滝山頂上の

小屋に急いだ時には、足にはフツズレ  
が出来タタタで坐り込んでしまった。

今思えばそれとして、どんな道をと  
う歩いたのか全然思い出せず残念です。

夕方になり、小屋から一歩出たとた  
ん、もうこゝは夢の世界であつた。

赤く染まった雲海、どこまでも  
優しく雲海、遙か遠くには、富士の雲峰  
がぼんぼんしている。

始めて見るこの幻想的な山のたまたま  
雲をさす雲ながら一人、時間のたつた

も忘れえと散っていた私、気が付いた時  
には星が、一つ二つと輝き始めていた。

翌日も雲一つない素晴らしい秋晴れで、槍  
穂岳をすぐ近くに見て、歌を口ずさみながら











日を浴びる。二の時程、噴火のリズムを薄快に感じ、噴煙を美しいと思つたことはなかつた。汽車の発車時刻も通り、ゆっくりもしていられたが、駒ヶ岳との素直な別れは、今も想い出として蘇ってくる。

噴火という一つの現象に幾度となく感懐し、その度歓声を上げずにはいられたかつた私、単なるヤジウマに過ぎなかつたかも知れない。しかし、仕事を忘れ、誰はばかるともなく興奮し、夢中になつていた自分に満足してゐる。噴火という自然を、自由に、自然に見つめることのできた一日。私は、少ない休暇の中で貴重な時間を過ごすことができたことに喜びを感じ、素直な想い出を持たせられた山と、太陽と、自然の威力と、それからハブニング好きの友人に、改めて感謝した心意持である。

暗黒の空に星が点在するのではなく星の中に夜が点在するかのようにおびただしい星が彼を取りまいていた。加藤はその星空の下に、胸ふくらまして立っていた。それを美しいと表現はできなかった。それは人間の表現感覚を越えたものだった。背筋の寒くなるような美しさだった。ひとりで噛みしめて他人には言げることのできない景観だった。……あのすべての星はおれのものだと叫んでもうそではなかつた。加藤はおそらくこんな夜アルプスの稜線を歩いてゐるのは恨みとリだと思つた。……このようにすばらしいものにめぐり会うことができた以上、生涯この世界からのがれ出ることはできないだろうと夢見ていた。





原

高

十人十色と言う様に人それぞれに山の好みがあるたろうし、山への接し方も色々あると思う。

私の場合は、巻礫山・霧ヶ峰の様な高原系の山が好きである。

文世的だなと思われても仕方がないが、ロマンチック（空想的）と言うか、孤獨を好むと言うか、暗渡った青空の下、春は新緑、秋は黄金色と四季それぞれに移り変わる高原（カヤトの原）に一人寝そべり目を閉じて、忘却とはすべてを忘れ去る事なり、などと名言をほざき、夕再び目をあくれば天を仰ぎ

。貴方（文）の心に空があるならそしてそれが青い空なら私（俺）一人で登ってみたいな何処までも——と口ずさみ、

夢みる人を想えば深く静かに滑軌せよの如く、我が心深く深く悩めるが如し？

ある時は童心に返って自然を相手に汚れなき悪戯で時を殺そう。

ある時は無我の境で心ゆくまで絵を書いてみたい。

私はこのような叙情的？な山行をポピュラーな山に求め、登る人の少ないウィークデイを選んで私の山に対する心の糧としたい。ケッケッケッ





# 尾瀬

渡辺関代

(版画も)

明るく樹林の木道をドンドンと  
降ると十字路に出る

見わたす原の向うに至仏山がある

真すぐに伸びる木道をどこまでも行くと  
至仏山につきあたる

明日はあの山に登ろう



# ある日ある時

飯田一重

45年7月27日 笠ヶ岳

何度かこの山を自分の物にしなければいけ  
ない、心はあせるがいざ夏になると、あの山  
この山とつい浮気を起してとうとう初志の日  
から八年目、山頂に立っ左喜びは紙面には表  
わせない感激でした、三千米こそないかなぜか  
私のハートに思い続けた日々、

夜明けと共に写し出される山々、すでに歩  
いた山が今日の為に再現して夢のようだ、胸  
がしめつけられる、やったぞ久保田さん貴方  
の山に私は登った、皆さんもそれぞれの思ひ  
を又四間薬師から袂走した凌げた体に、又い  
つか来るとも知れない永遠の恋人、笠ヶ岳よ  
、アナタ程私の山歩きの中で、ひねくれもの

で来る度に寄せつけず、でも今日は行程も軽  
るくアナタを踏む事が出来た、でもいつまで  
も世の中に咲き誇る静かな山であってほしい、

44年6月15日 巻機山

私でも大丈夫歩けるかな、でも行こうスラ  
イドで見て私の心は動かされる、

夜露と大源太の雄大なるピーク、苗場の広地  
ががいま見える、えーと全員で16人少し夕  
日でも食事が余しみだ、おにぎり、サンドイ  
ッチ、弁当、腹八分、オット帽子を忘れた、  
手拭でハチ巻き、太い足にニッカズボンどう  
見ても中年のオッチャンにしか見えな、で  
も今日は山に来たのだ、巻機山むすかし、宇  
の山だ、多分左巻きとは同じ出身だろう、  
樹林帯を抜けると草地、素晴らしい景色だ、でも  
皆はもっと、良い所へと急いでいる、でも  
も私はゆっくりと歩く、誰も付いて来なくて  
はいいので気が乗ら、でも石山さんがおミリで

私を写している。きっと美人だからだろう。雪面で見及制動。これは私の特技、太っているのでスピードが出る。冷いソーダラップの美味しさ。地塘があつたりしてしばしば美しい顔に見とれる。ただし自分ぢやない。牛首での一時、越後三山や谷川連峰を心ゆくまで見とれる。笑しさに目が凍れる少し寝よう。農家の軒先まで山しじきを食べる。うまいうんと食べた。でも翌日お腹をこわしたのが残念。

#### 44年7月例会後

しだ21号ありがとう。中でも山でバテルを読んでN嬢とは多分私の事かと思ひますので本日返答をさせていただきます。

たしかにこのところベースも落ち昔を想う友には物足りないかも知れませんが、それにしてもダラダラ以外はないとはあまりにもズバリなので感心しました。思えば久保田様とは長い間吉しみ喜びを共にして限りない友情愛で

結ばれ感謝に耐えません。私としたことが多分甘えん坊だったのでしよう。久保田様なら兄貴より親父のような気がして少し位怒られてもヘイッチャラだと思つていたのがついに氣にさわつたのかも知れません。

この新ハイに入つて十余年勇ましく元気でバテる事も知らずに歩けたのも遠い昔かも知れない。でも今の私はガズ／＼登るよりもゆっくりと鑑賞して歩くのがずっと想い出になるような気がしてベースも落ち周囲の方々を心配させて申訳けありません。小諸でのピフテキ美味しかった。スキーもしたかったが雪なのでつい皆に逢いたくなつたので戻つた。私は山に対しての魅力は人一倍持つています。歩ける自信は充分ある。でもヤチタの一言は得意な言葉。氣にしない氣にしない。本当にかけばもっと／＼早く歩けるだろう。体格を良しへ肥満体。血圧その世異常なし。でも脳液にあるかも知れないう。支部の若者よ私は今の歩き方は決して変えないう。場合に



よってモットのんびりする。もし付いて来な  
 ければそれでよし、いずれおいらく山岳会が  
 山登山（S・H、C長老の集い）に入る。そ  
 れまでは支部に居候する。最後に久保田さん  
 費女は非常にスタミナのある人だ。バテる事  
 も知らずこれもお様の栄養食と氣のつかい方  
 で巧を成してゐるのでしよう。これからも家  
 庭と山をうまく使い分けて頑張つて下さい。  
 さあこの次はどこの山に行くかな。

オワリ



そして加藤は、硫黄岳のいただき  
 に立って二度とふたたびちくしよ  
 うのという、不遜のことばを山に  
 向つて吐くまいことを誓つた。  
 冬山への挑戦という観念が大きな  
 誤謬だつた。戦いであると思つて  
 いたところに敗北の素因があつた。  
 山に対して戦いの観念を持つて  
 おしすすめた場合、結局は負ける  
 方が人間であるように考えられた  
 ……、たいへんむことをやろうと  
 する以上、たいへんな覚悟がかか  
 らねばならぬ、いそがず、あわ  
 てず、慎重にやらねばならぬと  
 いうことが……



45年11月22日、42番目の百名山、琴科山頂を踏む。新雪の山頂はまるで月の世界を思わせる。以前に月に行ったことがあるので知

ている。近く南アルプス、遠く北アルプスの白い峰々眼の前につらなるハ、岳の稜線、快晴の中に幾々登山者三名は眺めている。

日本百名山、支部の中で

よく耳にする言葉である、よく

知らぬ人の為に書き加えて

おこう、登山家へ？、深田久弥氏が

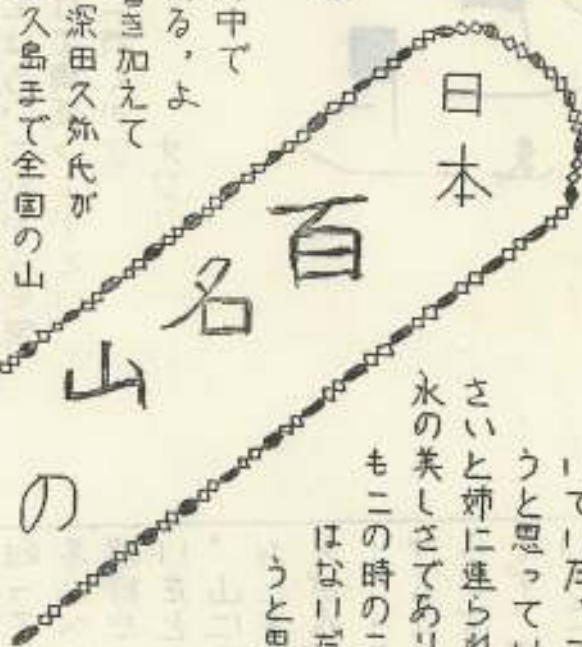
北は北海道から南は屋久島まで全国の山

頂をきわめて、この中より選び出した名峰

これが日本百名山です。もっとも個人的な見方

により他にモすぐれた山が多くあるであらうが自分な

りに二二二、三年は山に登る一つの目標としている。



1 33年11月3日 大菩薩嶺 (快晴)

百名山とはいわずとにかく初めて山に入っ  
たのが大菩薩嶺でした。姉も山が好きでよく歩  
いていた。このころは山のどろどろがどろどろ  
うと思っていたが、とにかく一度行って見な  
さいと姉に連れられて登った。まず第一の印象は霧  
水の美しさであり、雄大な景観であった。必ずし  
もこの時のことが現在の山好きになっただので  
はなれだろうが多少は影響しているだろ  
うと思う。

2 34年8月2日 富士山

このころは年に1、2回しか  
いかず前年の大菩薩に続いて二  
度目の山行であった。富士は登  
る山ではなく眺める山だとよく  
言うが、やはり日本一の高山。  
登って見た。実際には悪天候で  
頂上まで登れず、翌年あらためて登  
った。

3. 丹沢 35年6月17日

4. 谷川岳 36年7月16日

山行7回目にして一人で行った。土合より西黒尾根を登り、天神平に下った一般コースであるが、かなり苦しい登りであった。

5 磐梯山 37年8月5日

東磐梯に二泊三日のキャンプに行った。総勢50名の大部隊、騒がしく炎天下に登った。暑い。あつい。アツイ。これだけであった。

6 那須岳 37年11月3日

7 阿蘇山 40年1月3日

正月に友人と二人で九州旅行に行く。親光までではない、ザックをせおい、登山靴を履いての旅行である。今思えば阿蘇だけでなく、霧島、開聞岳等登ればよかったとつくづく思う。でもしかたがない。このころは百名山等知らなかったのだから。

8 美ヶ原 40年5月13日

この年のゴールデンウィークは吹雪に明け暮れて全国で凶悪者を出した。信越線大屋

信越線大屋

竹田明

駅より丸子

町を過ぎて残

雪豊富な素直を

登った。頂上では

町の中よりその手

抜け出てきた様なお嬢

さんかいて、バスは頂

上まで登っている。こちら

は雪山の出立少々気がひけた

おまけに二人の人の言うには、

「あの人達あんな卒でたいぶんオ

ーバーじゃないかしら」と陰口を言

う。だがこの日は晴れていた山も一

夜明ければ猛吹雪、バスは走らず、

こちらがまちがってはいなかったこと

を立証してうっぷんを晴らしたので

歩

み



ある。

9 至仙山 40年6月26日

天幕を持って登った尾瀬、五人の気のあつた仲間と楽ししい二日間を過ごした。

10 白馬岳 40年7月10日

このころよく一緒に登ったゴローちんと言ふ友人と二人で初めての、北アルプスの一角に登る、くわしくは前の、しだれにも書いたのはおろくが、山のおそろしさを味わされた山行だった。

11 奥白根山 40年10月17日

紅葉の奥日光、すばらしかった。

12 雲取山 40年12月31日

雪のある山に初めて単独で行く、積雪約40cm、天候に恵ぐまれ、富士の美しさを思い出す。

13 八ヶ岳 41年8月12、15日

細子湯より中山峠に登り、赤岳を感えて山沢に下る。夏沢峠の山小屋での客引きには少々まいった。

14 金峰山 41年9月24日

秋の大型台風26号が奥秩父を通過して、家の人に一番心配させた。父親はふだんそっけないがやはり一番心配してくれたそうである。

15 浅間山 42年6月4日

新ハイに入って初の百名山。久保田先輩に連れて行ってもらった。

16 黒岳(水晶岳) 42年7月22日

思川出の北アルプス系集中登山。太郎平より雲ノ平、アルプスの奥深く温泉がある高天原、そして奥銀座縦走路をへて七倉へ。

17 檜ヶ岳 42年9月4日

夏山が終り、静かになった表銀座へ。一日中アルプスが見渡せる好天気。檜の頂上は我々三人だけ、感激だった。

18 安達太良山 42年10月15日

ほんとうの「空」を見たかったがあいにくにも見えませんでした。

19 甲武信岳 43年5月4日

頂上附近では雪が舞いまだお山は冬である

20 北岳 43年8月9日

21 間ノ岳 43年8月9日

南アルプスに初めて入山。オニの高峰北岳より白峰三山縦走。

22 瑞牆山 43年11月17日

百名山だから登るのだと行った山である。二枚からが本当に、百名山に興味を持ち初め

た。

23 両神山 43年11月23〜24日

前から登りたかった岩峰のこの山、連休を利川して清港小屋に泊り八丁峠に抜ける。期待どおりの山でした。

24 天城山 44年1月3日

大菩薩に初まり、今回で山行百回目。やはり記念すべき山行でしょう。

25 風凰三山 44年5月3〜5日

当時の人は二存知、硯君と係を受け持ち、朝は夜明け前に歩き始め、夜は11時に宿泊地にたどり着くという大変けっこうな山行でした。

26 四阿山 44年5月18日

このころ行く山と言えば百名山ばかり、しかも夜行日帰りの利く山を、費用がかさんで



もタフシーを利用して登る。この時も一人で、五〇〇円位の車代を使う。だがそれだけの価値があった山だった。

27 躰ヶ岳 44年6月1日

尾瀬に残る一つの山、大清水より尾瀬沼・橋上、尾瀬ヶ原、富士見下と歩いた長い行程さすがに疲れました。

28 巻機山 44年6月15日

二存知磯島ことイソコが初めて参加した山

29 苗場山 44年6月29日

普通一泊で行く所、タフシーを利用して、夜行日帰り、百名山だとしてこんなに行きたいのだろうと思った。

30 赤石岳 44年7月29日

31 聖岳 44年7月29日

単独で南アルプス南部一週間の縦走、30キ

口近い荷を持って、歩いて来た感激は今でも忘れがたい

32 妙高山 44年9月14日

33 火打山 44年9月15日

初めて山より見る日本海、なんとも言えぬ気持ちで長い時間眺めていた。

34 武草山 44年9月28日

この年11回目の百名山、よくも線いだものである。

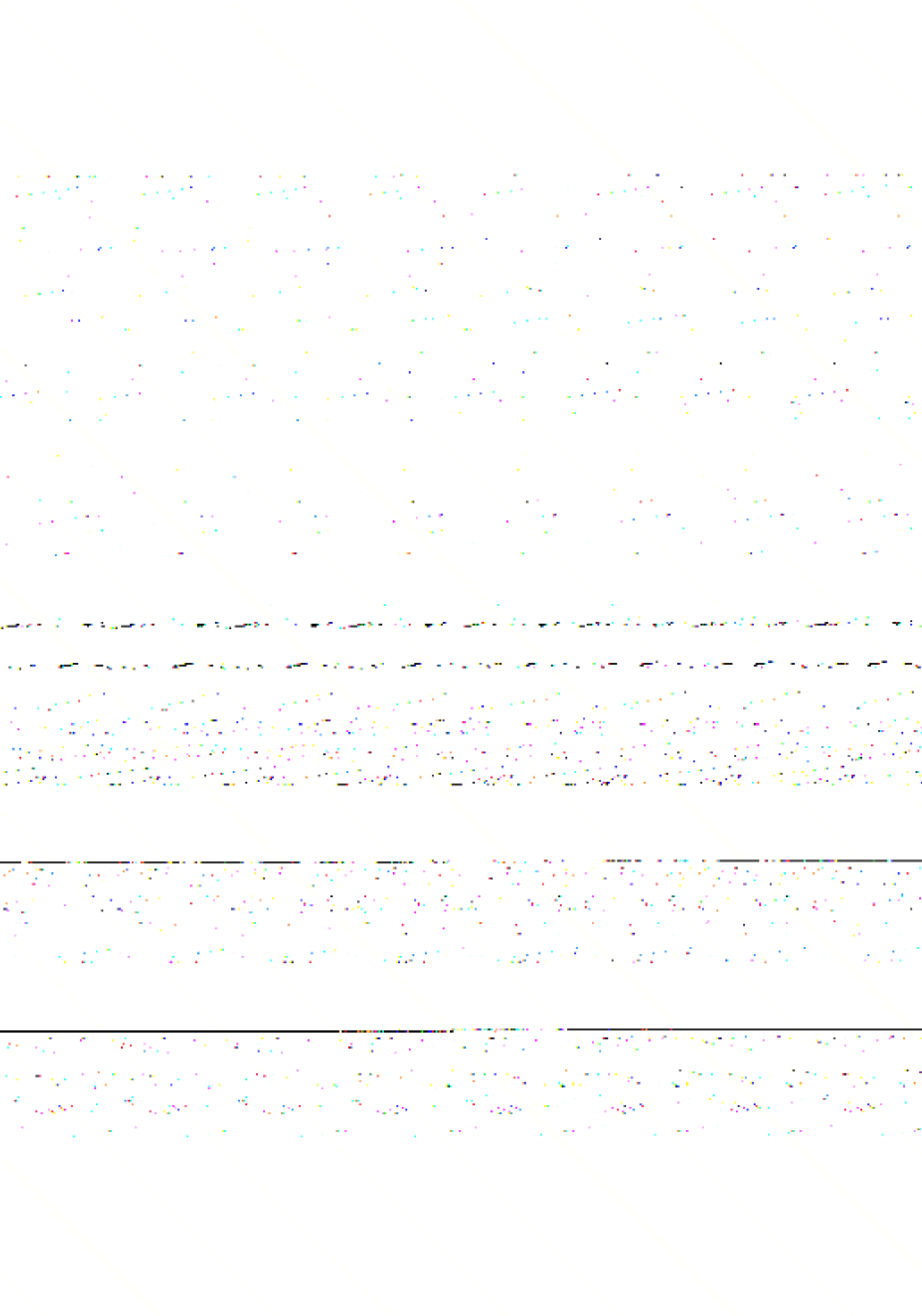
35 仙丈岳 45年5月2日

36 甲斐駒ヶ岳 45年5月3日

五月の南アルプス、実力では行く山ではなかつたかもしれないが、天候に恵まれて、無事終了。

37 鹿島槍ヶ岳 45年8月3日

38 五竜岳 45年8月3日



39 男体山 45年8月30日

三回目の正道とかでやっとな登ったと言う感じ。

40 霧ヶ峰 45年10月4日

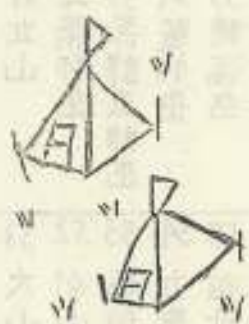
おかしな天気、車山山頂では小雨が降っているのに北アルプス方面はすべて見える。山ではこのようなこと初めてです。

41 木曾駒ヶ岳 45年10月10日

皇海山に行く予定が急に破産達のパーティーに合流して中央アルプスへ。小屋でポンチョを持っていかれ、いがかげん頭にきてしまった。下りは千丈敷よりロープウェイでスイスイ〜。

45年の百名山は42番目の粟科山で一まず終り、さて46年度は何回行けるでしょう。少なくともあと8個行って50にしておきたい。

母は言う。山もいよいよ早く結婚しなさいと、でもしかたがたいですよこればかりはお山の好きな、お年頃のあなたもわかるでしょうこの気持。



理窟なんかにしゃあない。その答えは山へ年潮を入れてけると自然に山が寂えてくるものだ。だが山とていう奴はみどくけちんぼでな。一度にそれを教えてはくれないのだ。おそらく一生涯かかっても、なぜ山へ登るかというところがほんとうに分らないで死ぬ人が多いのじゃあないかと思ふ。



### Ⅲ Ⅱ の記録

吉岡信子

(Ⅰ) 45年7月

アイゼンからこぼれた  
細かくて白い土

指先でさわったその感触は……

ブルー グリーン ホワイト

そしてそのにおいは

545・7・25(エー)のにおいだ

石コロピ沢のにおいだ

この土をなめたら

あの日のカレーの味がするだろう

コンビーフのサラミのスープの味がす

るだろう

聞えるんです

飯豊山の話し掛けてくる声か

アイゼンからこぼれた  
細かくて白い土

(Ⅱ) 45年9月

地蔵岳での喜びをこう記したい。

木の間越しの白峰三山のおざやかさに歓声  
をあげ、早く見ようと菱師岳に急ぐ。けれど  
そこへ着いた時には無情な雲が低く垂れ込め  
先程のくっきりとした山姿を隠してしまった。  
その内に晴れるだろうと期待してゐるのに切  
れそうて切れぬ雲にいらくし出した4人  
木のトンネルを出ると水色のきれいな空と  
板敷に格好良い地蔵岳のオベリスクが、いき  
なり目の中に飛び込んでくる。近くからのオ





好展望、北岳での二系光、大門沢の紅葉、  
二泊三日の白峰三山の山旅は時間が経過する  
に俟って、より大きな金額となり曼いとなっ  
て舞ってくる。

山日記の一部をこの紙上に託し良き仲間に見  
縮の気持を表したい。そしてすばらしかった  
山旅をもう一度思い出してみたい。

### ○出発前の事

二週間も治療を受けたのにネンゾは思わし  
くなく、出掛ける如く五日前からは辰君だけ  
に任せておけず懸命に足の運動をしたりした  
。正直のところ、あと一週間の猶予が欲しか  
った。足で行動する山において多少でも故障  
があったらとても無理だと判り切っているし  
、大きな負担になる事は明らかであった。そ  
れでも私は……

### ○10月9日（金）5時～14時の事

玄河原へは五時に着く、懐中電燈を用意し

てすぐ登りにかかる。少し登った水場で朝食  
、新たな覚悟でいよいよ歩き出した。本で一  
志卒知はしていたものの、階段状の急坂は最  
も私の苦手とするところで、心臓はどきどき  
するし調子は堅わず、カを入れて登る度に左  
足の痛みを感じ全く良いことなしの登りとな  
ってしまった。夢を出して一時間、仲間さん  
にはなければささと引き返してしまえるのに  
と文句ばかり言っていた。荷物分けましま  
うか。私のペースが全く上がらず見兼ねての  
言葉かな。（でも分けなかつた事を念のため）  
一山をトラバースするようになり平らに近  
道になった時は本当に救われた。御池小屋は  
営業しておらず一棟だけを凌いで閉ざされて  
いた。まず一つの目標に到達。ここで飲んだ水  
はおいしかったなあ。御池には北岳の雄姿こ  
そ映ってはいなかったが、あそこが北岳の手  
の届くような近くに仰ぎ見られた。御池は小  
さな山肌ではない。けれど周囲は広々と  
してのどかだ。鳳凰三山からの北岳はもっと

威風堂々格好良かったのに目前に迫る三、一九二預は何が小さくて物足りないう感じもする。カメラに収めたり三十分遊んで又三時間の覚悟を作り、車っすぐに細く恨めしく延びる一本の道に向き、三十分の休みが利いてか出足はまず／＼だがそれもすぐ崩れ出す。重たい体を引き上げるのも案ではないう。二十五分歩くと疲れを感じその内二十分しか歩いていよいよの時計を見るようになり、早く休憩にしてくれないかなあと半分必死？で歩く。相棒はいら／＼しているだろうと気にはなるけれど動きが心に伴わず、もうどうでもよくなってしまう。どうやら二人昔私がバテた為案になつたらしく一向にペースを落さないう。すぐ前との差がつく。立止ってつめてくれる。又すぐ差がつく。そんな繰返しだけをよく覚えてける。

歩く事に精一杯の私は後を振り返る余裕なにか全く持たない。言われて……紛れもない、素師岳親音岳地蔵岳なつかしいオベリスク

右から左へちゃんと間違ひなく並んでいた。ヤッぱり乙さんとMちゃんに見せたかったなあ。あれが焼跡、親音岳から風分下ったのねえ、あの端から端まで歩いたんだわ。嬉しいなあ。今回期待の一つをまず遂げた。風塵も見えた事だし紅茶でも沸して休みにしよう、あわてる事もない。

一度盛り込むと立つ時に勇気がいる。車すべりと言ってもこれまでの道と何ら相違ない道を前よりもっと危い足取りで前進。ガンバレ／＼小太郎尾根までもう一息。

トシーン、キスリングから解放されて仰ぐ駒、仙丈、言う事なし。いくら見ても見あまない光景をあきるまで眺め暮した。又大休止。有の小屋までわずが、急ぐ理由は一つとしてない。

○10月10日(エー)4より6時の事

行手の暗闇の中に北岳の頭が黒々と盛り上がっている。懐中電燈で道を照しながら前進、



ハイマツの根ツ子か飛び出したようなゴツゴツの道、少し高崖を上げると吹きさらしの風が容赦なく前後左右を通り抜けジーンとした冷たさを感じる。

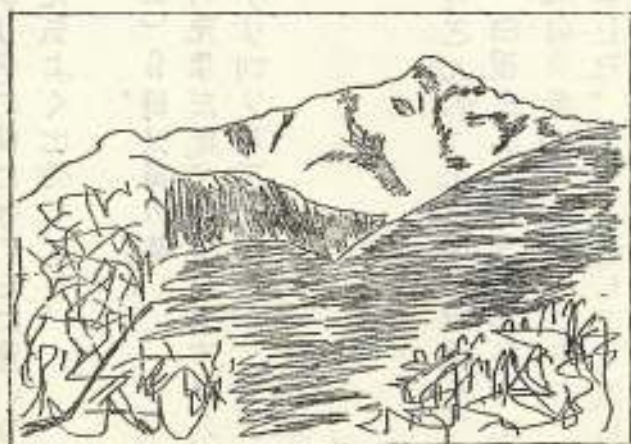
二の黒い空の下、眠りから醒めやらぬ山の囲みの中、三つの小さな点だけが上へ上へとこそ／＼動いていく。この広い天の中に存在するちっちゃな三つの点は何んぞ意味を持つのだろうか。あえぎながら登っていくこの動く物体は一体何なのだろうか。眠っている山を起さないうちにただ黙々と歩を運ぶ。一つの小さな広場、山頂だろうと荷物を下ろしたがどうもおかしい。まさかと思つた前方のピークがどうやら山頂らしい。下って又登って北岳に立つ。

一歩乗り、しばらくの間は三人だけのもの、三人は勿体ない位広い山頂で何とも愉快である。すべての世界が朝を迎える準備をしている、我々も心の準備を整え、静かに待った

朝は  
穏やかに  
そっと  
やってきた。

黒々とした大きな固まりが

少しづつ目を開き、やがてあたり一面に朝の気配を漂わせ始める。空には小さな白い雲が点々としていて、その雲に反射して作り出された日の出前の感激的な一瞬。この時ばかりは周囲の山々の存在を忘れ、三人の見つめる所はただ一点、山の頭がうっすらと明かるく





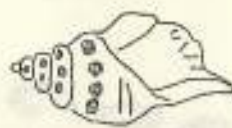


何故なら苦しいと書いてゐる所が皆一致してゐるから

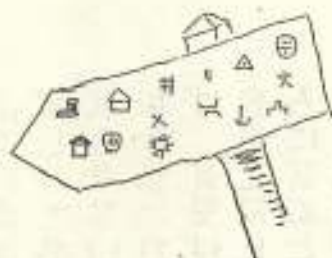
汚いと書いてゐる所も一致してゐるから  
北岳のピラミダルな……と同じ表現をしてゐるから

そしてガス、雨という言葉葉の所で私は辛味に晴れてゐたから

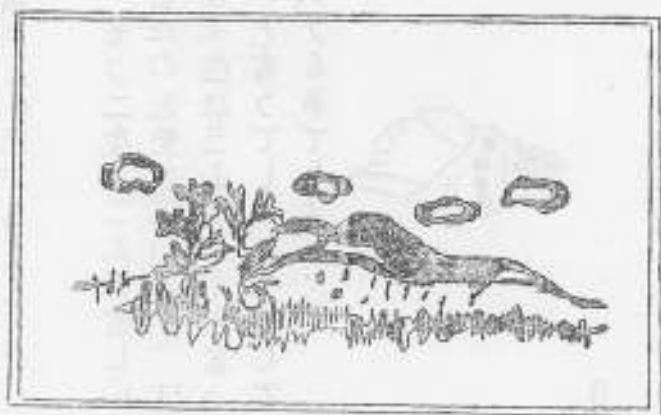
もう二度とこんな苦しいの所登らないと口にしたのを覚えてゐます。けれど、もしIさんが又白峰三山へ行くと云つたら、私も行きたいと言つてしよう。そして又あの草すべりでバテる事でしょう。



地図の使い方は非常に簡単でありながら非常にむずかしいものなんだ。地図の見方がほんとうにわかるようにになれば一人前の登山家にされる



ところであなたは正しい地図のたのみ方を知つてゐますか。ええ、知らなくて。それで、あなたにこそ教えておいて下さい。



## 去年の山

久保田 治

しだの原稿、ながく書けなくて困りましたので、誰かさんと誰かさんの真似をして、去年一年の山行の思い出を書き手にします。

一月の大倉高丸 四季何時訪れても非常に良い山です。冬に登るのは初めてでしたが、矢張り満足させるに充分で

した。左ぐ、今では大菩薩山塊でも教少の原生林、竜子山山頂直下の鏡面池のうっそうとした感じ、それが前回訪れた時の忘れられなげな感觸でしたが無残にも伐採されて全くの明けっぴろげ、展望は良くなりましたが、何かと同じで隠されているところになんともいえない美しさがあると思はれるのです。

しだ二十一号。阿部さんの残照に兄む甲府盆地の印象像が四、五行のうちに見事に捉えられておろ、とても鮮烈な感じを受けました。遂かに憚る富士山や南アルプスばかりでなく、そういう広い視野で物を見る心、それは単に物を見るところでなく、促えかたの問題ですが、私ごんかは表面的に、ファイ

ンダーを通しての風景しか見ないという態度、なにか忘れられていたものを思い起させてくれました。

※——※

同じ一日の夜、栗一四方原一御座山、全くいらいらの事がありました。今でも妙に強く残っている事があります。それは四方原山から今宵の宿泊地白岩の部落へ下りて来た時です。この村は八ヶ岳山麓佐入でも最奥の高黒部落ですが、そのしーんと静まり返っている事、夜でもなほ口の人々、子一人、犬一匹外には見当らず家々だけが寒い冬の夕日を浴びて深閑とあるのです。まるで人間は全て神かくしに会って家だけが帰って来る人を待っているみたい、そこにあるのは忘れられた村風でも吹いていけば黒沢明の映画、用心棒のフーストシーン、口んとも不気味な感じを思い起させました。さびしい冬の夕景、静まり返った村、今でも妙に心に残ります。

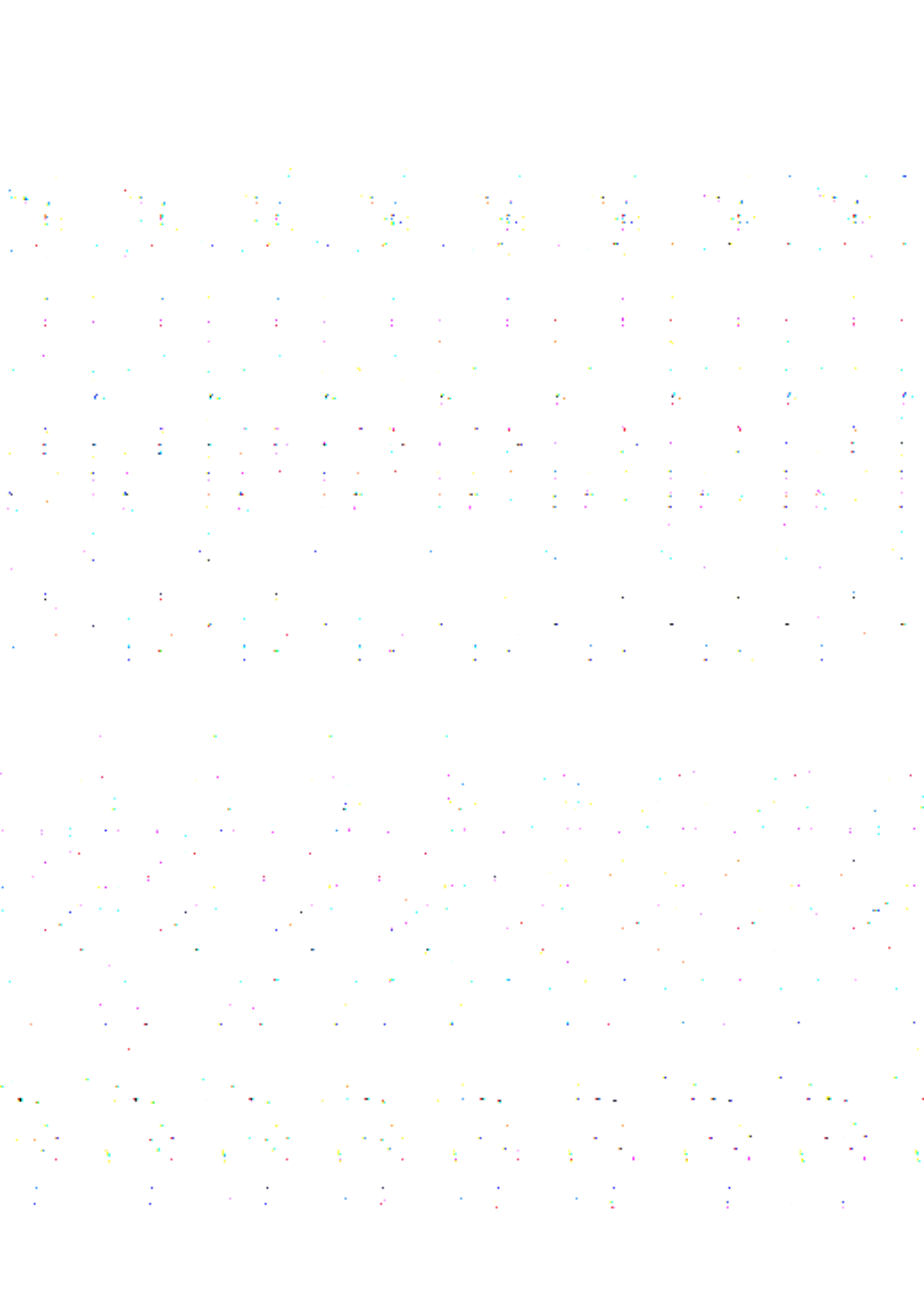
※——※

四日、クラブの田中編代さんが結婚し、しばらくして二んが子魚を貰いました。

青春の一時期を山に親しんで本当に良かったと思えます。丹沢、北アルプス、E.T.C.、吉しかったあの登り、ふり返った山の大きかったこと、先突して帰って来たあの心、忘れがたい心境です。これからは人生の大きな山を、あの志しかった登りを思い出してひとつひとつ二人して登りつめて行きたいと思えます。

私は彼女との山行は少なかったのですが、そのどれもが心に染る山行でした。常那山、丹沢主峰縦走、七面山とそのどれもが冬であり白い想い出となりました。それは雪とのたわむれであり、こけつまろびつはしゃいだ彼女、童心さと、明るさとその気さくさゆえに、そしてそして、もった大事に、言葉では言い表はせませんが、心を留めていたのでは無いで





なだ遠も良き山行であってほしいと願はずにはいらねえんでした。

※——※——※

夏山は長年憧れてはいた飯豊連峰。私が山登りを始めてからその目標が赤石であり並であり飯堂でありました。しかし徒走を終えた今、飯堂にはなにかもう一つ満ち足りぬ思いが残ってしまいました。あまりにも長い事憧懐していたせいでしょうか、期待があまりにも大き過ぎてしまったせいでしょうか。行きかう人が想像よりもずっと多かったせいでしょうか。北アルプスに比べればはるかに少ないですが、一確に個々の息い出、深いコバルトブルーの空をバックに白くそびえる石転び沢の大雪渓を目前にした時の感激、今や々と飯豊に来られたという実感に胸おどらせる思いでした。林道越えの遙かに長い花の絞線、そして杵差岳山頂々下の雪渓で作ったソーダラップ。夕暮れせまる飯豊本山のやすらかな一

日の終り、それは全く厳しやくば一時でした。キスリングを背負ったまゝで、今日の、あるいは今回の、山旅を惜しむように岡田の山へそれは殆んど三日間にわたって辿って来た峠々ですが、音が音もなく夕間に沈んでいく一瞬、私達の影は長く、山腹に尾を引き、花も雪も岩も土も、みんな色のない世界へと消えていく告別の瞬間をじっと見守りました。それらは決して忘れぬ事の出発ない素暗らしい想い出ですが、全体の印象がもう一つ足りないのです。それが何なのかは、……、今でも解りません。



キャンプ地 天狗の庭

※——※——※

九月は八甲田・もっとも吾妻山へ行くつもりで横濱駅へ行つたのですが、秋雨前線の停滞でもっと先に行かなければという事に成り、そこは金持だけが集まった強みで突如八甲田へ変更。強風に吹かれながら日本海と太平洋を渡り分けて眺めた幸せな山頂、一つの頂きから日本海と太平洋を見るという事が夢だったのですからその喜ぶは格別でした。そしてそれにも増して嬉しかったのは天気にも恵まれたという事です。自分の為には勿論ですが同行した三人娘がこれだけ遠くへ来て雨ではそれこそみじめなものですから。そういう意味では天気が良かったという事で、期待を裏切られずに皆が満足してくれたという事が一番嬉しく思いました。

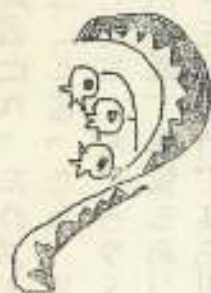
山頂から一投足の毛蒸さに下りればその見事な紅葉のおまらかな空がりに魅せられてしばらくは歩く事も出来ずに酔いしれました。

そして静かな紅葉の山旅を終えれば鼓々湯という大温泉が待っており早速どぶん。この温泉、浴場が大変大きく、又お湯もいい為、近郊近江はおろか、遠く東京方面からも観光及び湯治客がつかひかけ昼間からでも大賑ひ。そして東北の温泉の良さというのでしようか、男女入口は別々でも内へ入れば「コンニチハ」の混浴ではあります。もっとも同行の三人娘がどうしているかは私としましては全く関係のない事ですから心ゆく迄温泉に浸りました。目の前にはポインポインで誠に結構、混浴の場合夜のうす暗い電気の下でのほのかな情緒がえもいはれず良いのですが、昼間は又全く違って明るいですから使康的で素朴な良さがあります。矢張りこちらの人は慣れているのでしようか、こちらがとまどってしまいますが、山よし・風呂よしで命の洗濯が出来ました。もっとも三人娘は女心の浅はかさとても申しましようか、混浴反対とかで内風呂に入つたそうです。後で風呂代浴尊の時





と思つていた訳で、ようやく念願集まれました。快晴に恵まれたアルプスや富士山はあろが、奥秩父、八ッ岳も見渡せて素晴らしい。それはそれで良かったのですが、どうも御形山の印象は前回のの方がずーっと良いのです。原生林にサルオガセび、流れゆく霧の空を付てたれさがっているさまの見事な景、そして苔むした登山道のつやみが緑の美しさと、メルヘンの世界を旅した印象は今なを強烈に思い出されます。矢張り御形山は霧にけぶる感じが最高ではないのでしょうか。天気が適当に思いますが、いよとけう山もあつても素的だとは思いませんが、御形山はそんな山なので



登りに登くばる事受け合います(元より)



上図のように坐蒲団三枚を足にのせ上半身を起す、倒すを繰り返す。二の運動を毎日20〜30回行って下さい。

編集後記

◇仕事は之程らず早稲して切替切りする  
の主なかゝり書が揃いまして。出来ば  
之は六月に夏て川左郎にて作文の一行  
一筆を大切にしてみます。

◇いたずら書きが好んで余白があるとする  
ぐ何が書きたくなります。今回は新田  
次郎著「孤高の人」の抜き書きを致し  
てみました。

(吉岡)

毎日三十分ずつではいながら、必ずがり切りし  
うといはながら、一月に入ってがら手を付けた  
この仕事、三十分といつたが道具を出せばどう  
しても二時間や三時間はすぐたつてしまひ、夜  
中の二時や三時までかかった事も何度かありま  
した。そうして苦勞をしながら、やっとここに  
ついで編集しが完成。おぼろげなひまをみつけれ  
がり切りしてきただけに、感激もひとしおです  
。青春の一時期、新ハイに籍をのけてゆるねけ  
ますが、このついで編集には、その一つのくさ  
りとして、よい記念になる事でしょう。

(佐々木)

二月二十一・二十八日の両日を使い、しだ22集の印刷、製本を完了  
卸場方いただきました。方々に互にお礼申し上げます。

しだ<sup>ど</sup>ろ 第22号

発行 昭和46年3月10日

新ハイキングクラブ横浜支部

横浜市保土ヶ谷区保土ヶ谷明一の二丁目(鏡本町)

編集者 佐々木美智子 吉岡信子

SHC  
134